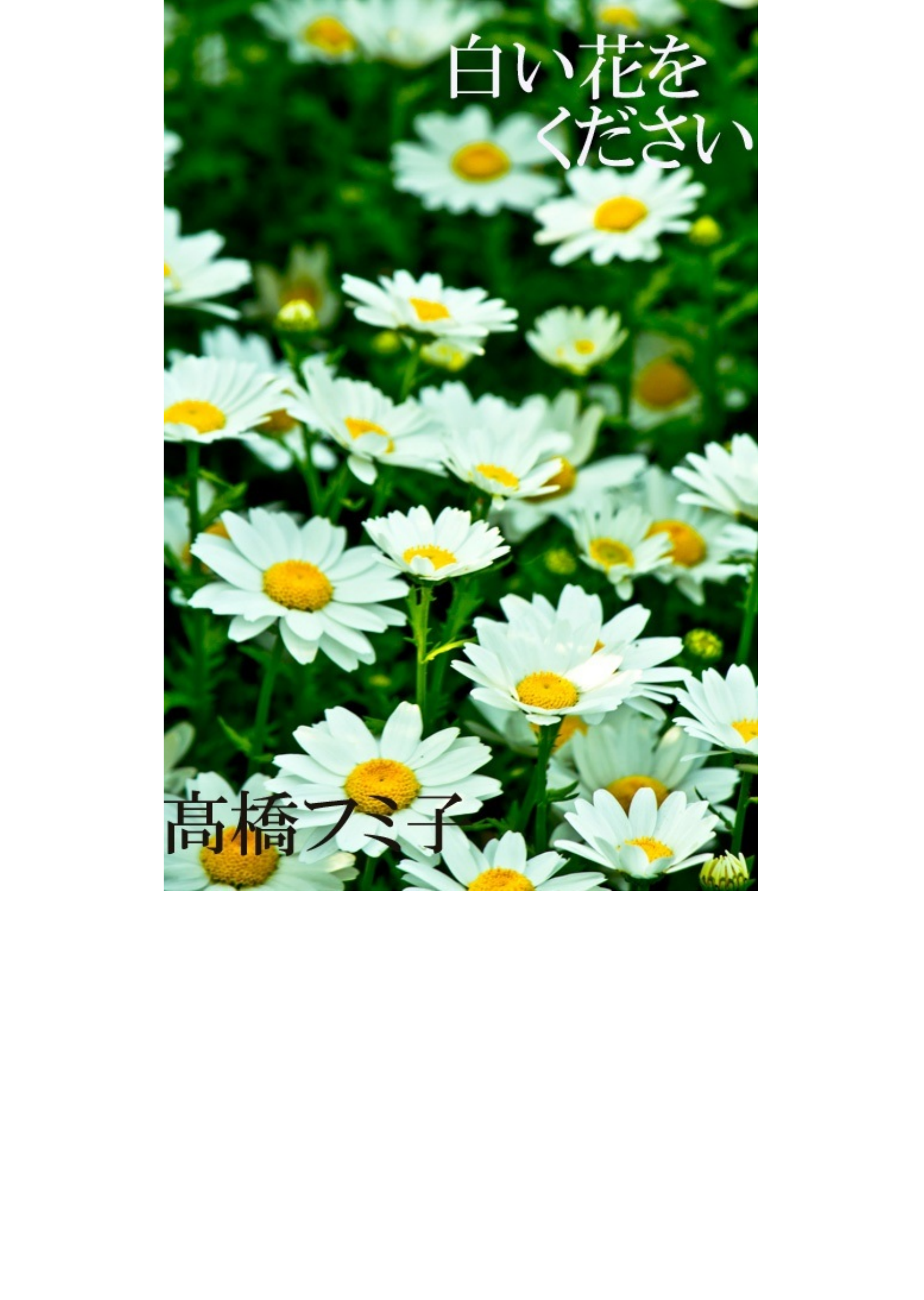




白い花を
ください

高橋フミ子

I 白い花をください

II 日記

表紙：ぱくたそ

I 白い花をください

I 白い花をください

惑わされてはなりません。神は侮られるような方ではありません。何であれ、人は自分のまいているもの、それをまた刈り取ることになるのです。自分の肉のためにまいている者は自分の肉から腐敗を刈り取り、霊のためにまいている者は霊から永遠の命を刈り取ることになるからです。 -ガラテア 6:7,8

開け放たれた窓からは、夏の名残りの暑い風が気まぐれに流れこんで来て、柱に結ばれたカーテンの裾を微かに揺らしていた。

涼は机の上に頬づえをついて、窓から見える木立の上の入道雲を見ていた。

それは、とても珍しいことだったので、クラス中の目が、校庭側の窓際の一番後の席の水木涼に注がれた。

担任の松永は、涼の視線の先を確かめるかのように外の中空を見ながら涼の席までやって来た。

「何か、珍しいものでも飛んでるか？」

間近くの教師の声に、涼はピクッと顔を見上げた。

「さっきから呼んでいるのに、何に見とれているんだ。あとで職員室に来なさい」

松永の額に汗が光っていた。

不審気に見上げる涼に、松永は、

「進路変更しただろう。なぜ進学しないの。お前、夏休みが終わってから、何かしら変わったねえ」

松永は、真剣な目で涼を見詰めて、涼が暗い顔で目を伏せるのを見届けて教壇へ戻った。

「では、今日は全てこれで終わり。明日、この前のテストを返すから楽しみにしてなさい。

じゃあ、水木、職員室へ……」

松永は、生徒一同を注意深く見回した目を最後に涼に落として、教室を出て行った。

「テストが戻ってくるのかア」

教室は俄かに、溜め息と話し声と、机や椅子を整理する音で騒がしくなったが、生徒達は帰宅する者と、部活へ行くものと、それぞれが教室から出て行った。

日直が戸締りをし、クリーム色のカーテンを引く。

野上敏夫は、机の下に椅子を入れてカバンを手にする涼を、じっと見守っていたが、

「涼ちゃん、進学しないの？ どうして？」

「どうしても」

「それ、返事になってないよ。ま、職員室に行って来いよ」

涼は頷くと、長い黒い髪を揺らして背を向けると教室を出て行った。

野上と涼の父親は、先輩と後輩の間柄で、会社でも上司と部下の関係であったため、家族とし

ても情報が行きかうことが多かった。

そんな訳で野上と涼は小学校入学前から知り合っており、しかも小学校以来のクラスメイトでもあった。

野上の父親は、水木涼が、男の子ならどんなに楽しみか...と、いつも言っていた。

女の子なのが残念だと、父の言葉の最後は決まっていた。

その父に、涼ちゃんが進学しない、と言ったら、父はなんて言うだろう、そんなことを思いながら、野上は日直の二人と共に教室を出て、三階から一階の昇降口の下駄箱まで駆け降りた。

涼は、職員室の松永の机の脇に両手でカバンを持って立っていた。

「早速だが、お前、夏休みまでは進学コースだったよな。主任から、お前が進学コースを外れた、と、知らされて驚いている。この前のテストも学年二番だよ。大学へ行かないこと、ご両親はご存じなのか？」

「知りません」

「どうして就職するんだ？」

「どうしても」

さっき、野上から答えになっていない、と言われた言葉を、涼は、再び口にした。

「夏休みに何かあった？」

松永は、話題を変えた。

新学期、涼を初めて教室で見た時に何かしら空気が違う、と思った。いつも、淋しそうに、悲しそうに微笑する涼だったのに、新学期からの涼は、どこかが変わっていた。

授業時間中に、窓の外をボンヤリ眺めていて、名前を呼ばれても分からなかった事など、一度もない生徒だったのに、近くまで行っても気が付かないほど、一体、何を考えているのか、夏休み中に何かがあったのだ、と松永は考えていた。

「何があった...」

涼は、左手の包帯に目を落としていた。

包帯は人差し指と親指間をくぐって手のひらを守り、手首で止められてあった。

松永も、その白い包帯に目を留めた。

そして、涼の顔を見上げた。

「水木、その傷、どうした？その傷と関係があるのか？」

松永の言葉を奪うように、

「私、決心したんです。ですからもう考え直すことはありませんから、ごめんなさい、先生、ごめんなさい」

涼は、頭を下げると、誰が呼び止めても振り向かない、とでも言いたいかのような勢いで職員室を出て行った。

それから、数日後。

山の手の、小高い丘の緑の木立に囲まれた学校から降りてくると、お城の裏手の道路に出る。

車が忙しく行きかうのを目の前に、涼は駅へ行くクラスメートと手を振って笑顔で別れた。

友人の姿を見送って、一人になると、涼は憂鬱な影を眉のあたりに漂わせて溜め息をついた。そして、思うのだった。

小学生の時も、中学生の時も、そして今も、学校から家へ帰る道が不思議でならない、と。まるで、何かに操られているように家に向かうが、家、というものが自分にとって、どういう所であろうと帰るしかないのだ。

子供は、生まれる家も親も選ぶ事が出来ない。自分が希望して生まれた家庭ではないのに、例えば、自分の育った家庭の中で、自分に対する愛を感じないとしても、例えば、命が危うい場所だとしても、生まれた家に帰るしかないのだ。

親とは、子供とは、何なのだろう。家庭とは一体何なのだろう。

人間とは、何者なんだろう。

いつの頃からか、抱いていた疑問を、夏休みのあの日以来、重く考えている自分に涼は遣る瀬ない思いだった。

愛することが出来ない子を、どうして産んだの？生まれたこと、生きていること、それ自体が間違いではなかったのか、とさえ、涼には思えるのだった。

お城の藤棚を左手に見ながら、角を曲がり、海へ向かう道路をたどると、一号線に行き当たる。一号線を信号を待って横切ると、そのまま、住宅地への桜並木に入った。

桜並木は、左右から交差して、滴るような緑の葉が、鬱蒼とレンガ敷の道路を覆っていた。桜並木は、海岸の広場まで続いていたが、その途中を涼は右へ折れた。

涼が行く、その道も同じように、覆い茂る桜並木の影に夕日の木漏れ陽がかすめるようにこぼれていた。

涼は、桜並木通りの中程で足を止め、格子戸をくぐって中に入っていった。

格子戸の右脇に木戸がある。その木戸を入っていくと池のある中庭に出る。

しかし、中庭は、建物の陰に閉ざされて見えない。玄関への道路から、中庭を隠している部屋が、実は涼の部屋であった。

涼は、玄関に入ると、畳が三畳敷いてあるあがりから、二階への階段の上の様子を見上げてから、右手の渡り廊下へ折れた。四メートル程の渡り廊下のガラス戸は開け放たれており、涼の部屋のテラスから延びて来ている藤棚の緑が風に揺らいでいた。

涼は、部屋のドアを開けた。一日中、締め切りの部屋は、熱気がこもっていて、汗ばんだ体に不快感を与えた。

涼は、中庭側のガラス戸を先ず開放し、部屋中の窓を開け、風通しを図った。

二階から、妹たちの声が聞こえる。

もう、夕食も終わって、宿題を始めようとしているのだろうか…。

涼は洗面所へ行って顔を洗い、室内着に替えると部屋を出た。

渡り廊下を出ると真っ直ぐの廊下はダイニング・キッチンに通じており、その廊下の左手の二間が祖母セツの部屋であった。

セツの部屋の前、つまり渡り廊下を出て右側の二間続きの部屋が客の接待用としてその家の中

心にあり、客室はまわりをぐるりと廊下に囲まれていた。客室の南の廊下の角からなお南に延びた廊下に、涼の両親、英二と塔子の部屋があった。夫婦の部屋の後ろに三階建ての蔵があった。要するに涼の部屋と両親の部屋は中庭を隔てて相對していた。涼は、食堂へ行った。祖母の部屋と客間の間の廊下は昼間でも薄暗いが、暗い廊下を通って行くと、食堂はまぶしかった。

英二が椅子にもたれて新聞を読んでいた。

その傍で、塔子は二本の編棒を忙しく動かしていた。

「ただいま」

「お帰り。遅かったのね」

塔子は、編物をテーブルの上に置くと涼のためにガスをつけて食事の用意をした。

涼は、母の声には返事もせず、ご飯を電気釜から盛った。

「涼、お前は進学コースに入っていないって本当か？」

英二が食堂にいたのは、このためなのだ、と涼は思った。叱られる、涼は思った。

「はい」

「親に相談しないで…。お父さんは、野上君のお父さんに、お前をどうして大学へやらないのか、と、さんざん言われたよ」

英二は、新聞の音をたてて畳んでテーブルの上に置いた。

「どうして進学しない？」

英二の声は穏やかだった。

「大学へは、この家から通学するんでしょ？涼はこの家にはいたくないの」

「何を言ってるんだ。それは涼の我ままだよ。若い世間知らずの娘を、たった一人で下宿や、アパートを借りて生活させられるはずがない。家族の元から通うのが一番だよ」

何が家族、こんな家族！と、涼は思った。

塔子が、涼の前に整えてくれた料理を見て、涼は、いただきます、と食事を始めた。

英二は、涼の進学に対して、父親としての気持ちを話したが、涼は黙っていた。

涼には、誰が何と言っても、水木という、この家にいる理由が見当たらなかった。

幼い頃から、水木の子供でいることに不信があったが、この夏休みに、涼が水木の家の一員である事実をみごとに打ち砕かれたのだ。

涼は、父が何を言っても、母が何を言っても黙ったまま食事を終わった。

食事の片付けをし、明日のためにお米を洗って、流しをきれいに掃除をすると自室へ戻った。「この前まで大学へ行くといっていたのに、一体何を考えているんだ。お前にも何も話さないのか？」

残された英二と塔子は顔を見合わせた。

「涼は、私を見くびっていますから何も相談を受けないわ。私、忘れられないの。あの時の私を見る涼の目…」

塔子は腹立たしそうな声でお茶を入れた。

「マーケットで買い物をしていたら、女の人が声をかけて来たの。水木涼さんのお母さんですか、って。そうです、と言ったら、涼さんは高校の入試、二番だったそうですね、って。涼の

中学校の先生だったのよ。

私、そんな事、涼からも知らされていなかったのだから家に帰って先生に聞いた事を涼に尋ねたの。でも、涼は、そうらしいわ、と言っただけよ。どうしてお母さんに知らせてくれないの、と言ったら、あの子、何も言わずに私をじっと見たの。あの時のあの目、私の子があんなに怖い目をするなんて信じられないわ。一言も、何も言わず、じっと見ているだけだったのよ。あの子は、親の私をバカにしているわ。だから、何も話さないし相談もしないのよ」

そう言いながら、塔子は、ふと、しかし素早く、別の思いが心の中に差し込むのを感じた。あの時の涼の冷たい軽蔑した目の光の中に、言い知れぬ涙が溢れて来たことを、塔子ははっきりと思い出した。すると、塔子の胸の腹立たしきは消されてきた。

あの時、

「涼は、お母さんを嫌いなのね。だから、そんなに怖い目で見るとね」

と、涼を悲しいと思って見つめたが、それ以来、涼は、塔子を見つめる事をしなくなった。

「お母さん」と呼んで、塔子と視線が合うと、涼は困った様子で顔をそむけるようになった。

あの時、信じられない程に怖い目で塔子を見ていた目から、こぼれ落ちた涼の涙を塔子は、今初めて心に留めていた。

涼にだけ、あの子にだけ、私はとても残忍な仕打ちをしてきた...塔子は、キリリと胸が痛むのを禁じえなかった。

塔子は、胸のエプロンを握りしめ、テーブルに片手をついて、体を支えた。

私は、この家には、いたくないの...涼の声が塔子の心に響き渡った。

二章

「吉岡先生」

松永は、保険の吉岡末に歩み寄った。

開け放たれた窓から快い風が職員室に吹き込んで来て、その風の中に秋の香りが感じられた。

「うちの水木ですが、手の治療に先生の所に行っているようですが傷はどうでしょうか？」

「ええ、初めは病院へ行って縫ってもらった方がいいと勧めていたのですが、治ってきましたよ。どうしてあんな傷を作ったのでしょうかね。ザックリと。最初見た時は驚きましたよ。」

「傷をつけた理由は？」

「どうしたのか質問をしても何も…。ただ、声を出して泣いたことがありました。最近先生がたが困っている子はあの子でしょ？」

吉岡は 白い美しい顔を松永に向けた。

「進学しないと言い出しましてねええ。あの手の傷に原因があるのだろうと思うのですがね。事あるごとに進学しろと励ましているのですが、まあ、頑固なこと」

松永は、頭をかきながら自分の机に戻った。

「ヨオ！久しぶり」

顔を見ると、詰襟の生徒たちは笑顔で近寄り親しい視線を交し合った。

「電話、嬉しかったよ。実は、何度もきみに電話をしたんだけどいつも留守だった。」

中学時代の親友、野上敏夫と藤田博文、田中悟、二見正の四人は、落ち合う場所を昔と同じくお城道りの書店にしたのだった。

「忙しかったんじゃないの？実は、君たちが八月の終わりに 駅で電車に乗った僕に、水木涼のことで話があるって叫んだろう？ それを思い出して電話したんだ」

野上は三人を見回した。

「ああ、覚えているよ。それで 僕も電話したんだけど、留守だった」

「出ようか、ここで 話していても店の邪魔になる」二見は 書店の支配人である男性に頭を下げて先に街路へ出た。

四人は誰が言うともなくお城の方へ足に向けた

「水木涼は どう？元気？」

「このところ、三年になってからは全然会う間がなくて」

「涼ちゃんは大学に行かないと言ってる。理由は一言も言わないで、ただ進学しないと頑張っている。」

と 野上は靴のつま先を見つめて歩いた。

「そう、水木涼の答えは、そう出たんだ」

藤田の声は、はっきりとしていた。

「え？答え？」

驚いたように藤田を見る野上に田中は

「僕たち三人は学校が同じだから計画も立てやすいだろう。夏休みに水木に会いたくなって彼女の近くの海へ泳ぎに誘おうと思っていったんだよ。そして、水木の家格子戸のベルを押そうとした時に、水木が家から普通ではない様子で駆け出して来たんだ。水木は 左手を右手で握りしめて、その両手が血で...真っ赤で...白いブラウスも、ジーンズも血が飛び散っていて・・・」

「僕は思わず警察に110番だと叫んでしまった。しかしそれを藤田がストップかけたんだ。なにしろ水木は家の中から飛び出して来たんだから」

「それで、水木はどうしたんだ？」

野上は 藤田、田中、二見の顔を見比べた。

「走って、海へ行って...海水の中に両手を入れて・・・」

「大声で泣いていた」

「悲鳴のような声で、あまりにも痛々しくて、驚きもあって...僕らは近寄れなかった。」

「・・・」野上は言葉もなかった。

「あの時は、あまりの衝撃に判断がつかなかった。傷を負って家の中で治療しないでどうして外に飛び出して来たのか」

「あの時は心に閃いた事が信じられなくて信じたくなくてどうしたらよいのか分からなかった。あれからずっと考えるのだけど、水木涼は家族の誰かに・・・」

藤田は口ごもった。やはりあの夏の日と同じように、その言葉を口に出す勇気がなかった。だから

「故意に傷つけられたんだよ。」と 結んだ。

「故意に傷つけられた、そうだね、その言葉が一番穏やかだね。僕もそう思う。水木は」

四人は黙ってお互いの目を強く絡ませて、恐らくそれが事実だと絡み合わせた目で頷き合った。

「覚えてる？小学三年か四年の時、体育の時間に体育着がめくれて水木の背中が見えたこと。」

田中の声を聴きながら野上はお城の公園のベンチに腰をおろした。あとの三人も野上に倣ってそれぞれベンチに座った。

「ああ、思い出した、あの時水木の背中は全体が紫色だった。先生が驚いて医務室に連れて行っただね。」

二見の言葉に数分沈黙があった。そうだ、そうに違いないと言う沈黙だった

「だから いつも淋しそうだったんだ。誰にも何も言えず・・・」

藤田の声が重かった。

「待てよ、水木涼の親友に江藤千秋がいたよね。江藤なら水木のこと知ってるよ、きっと」

野上の目が光をおびた。「彼女にあってみよう」

四人の少年は、顔を見合わせて頷きあった。

野上は、小学生の頃涼の背中が紫色に内出血して不気味に見えたことを思い出していた。僕は友人の中でも涼ちゃんのことを一番よく知っていたと思っていた。しかし、本当は何も知らなかったのだ。涼ちゃんにとって一番大切なことを僕は何も知らなかった、と野上は思った。

中間テストが終わった日、藤田と二見は涼を訪ねて水木家に赴いた。桜並木も紅葉を装い始め、黄色や赤色の葉が吹き渡る風に揺らいでいた。

テストの数日前、藤田と二見はお城どうりの本屋で涼を見かけた。

涼はかつてのクラスメートに気が付かないのか、気が付いても触れられたくないのか本棚ばかりに集中していた。

あの夏の出来事を藤田たちに目撃されたことで涼は昔の仲間を遠ざけているのだろうか。もしかしたらそうかもしれない、と思ってもだからと言って藤田も二見も遠ざけられたままで居たいとは思わなかった。

小学四年生の時、クラスの委員として生徒会に出席した時藤田は初めて涼を近くで見たのだがその時から涼を強く意識していた。

同じクラスだった野上が廊下に行く涼に「涼ちゃん」と声をかけるのを見て、理由もなく腹が立ったこともあった。

そして涼と同じクラスになった時から、藤田は涼をフルネームで呼ぶようになった。

水木と呼ぶのは野上の手前悔しかった。だからと言って野上のように「涼ちゃん」と呼ぶには恥ずかしかった、他の女子と比べても「涼ちゃん」と特別に呼ぶ理由がないと藤田は思った。だからと言って、他の女子と同様に姓だけで呼ぶことは涼の前では平凡すぎると考えて「水木涼」と殊更に呼ぶことにしたのだった。それ以来藤田は涼をフルネームで呼んでいた。

水木涼がこのまま遠くへ行ってしまうには悲しすぎると藤田は思った。また、涼について何も知らないでできたことが心を刺していた。この手で、藤田そして仲間たちと仲間である涼を包んであげたい、そんな気持ちもあった。

藤田は、水木と 表札のかかった格子戸のベルを押した。

格子戸越しに涼の部屋の姿が見えるが、その窓から涼の顔が覗いて、消えた。

涼は部屋の脇の木戸から出て来て藤田と二見を格子戸の中に招き入れた。

「電話、有難う」涼が二人を見た。

瞳の中に笑みはなかったが、口元が微かに笑っていた。

「元気だった？」

二見が落ち着いた声で涼を見下ろした。

「ありがとう」涼の静かな声であった。

涼は友人を玄関へと導いて、上り台にスリッパを二人分並べた。

「どうぞ」涼は先に立って渡り廊下へと曲がった。

「君の部屋でいいの？」

「いいのよ」涼の声は凜としていた。

そういう声の調子を二人は初めて聞いて、顔を見合わせた。何かに挑むものを感じた。

子供の頃、何度か水木家を訪ねた事があったが何時も四方を障子と襖で囲まれた中央の大きな和室に通され、涼の部屋には入れて貰えなかったのだ。

涼は、二人を部屋に招き入れると小さなテーブルセットを示しながら椅子に掛けるように促

した。

「水木涼は子供の頃から可愛らしかったけど、今もたまらなくチャーミングだね」

藤田は真っ直ぐ涼を見ていた。しかし藤田の言葉に涼は嬉しいとも恥ずかしいとも感じないで、静かに首を左右に振った。孤独と悲しみに押しひしがれた涼の心は、そうした言葉に反応する余裕が無くて涼を慰めようと気づかった藤田の気持ちは通じなかった。

「水木、進学しないって本当に決定してしまったのかい？」と二見。

藤田と二見の視線に涼はこの人たちもそのことを言いに来たのかと辛かった。

「水木、はっきり言うけどごめんね。夏休みに水木は血だらけで外に飛び出して来た、あの件だけど、あの事が大学進学を阻んでいるの？僕たちは学校での君しか知らなかったけど」

「私、もう決めたの。だから何も言わないで。いろいろ言われるのはこの家の人と学校だけで十分なの」

涼は小さな声で二人の友人に頼んだ。

「しかし、西岡先生が言ったんだ。水木には可能性があるって。大人だって負ける、そういうものを持っているって。だから話してくれよ。一緒に考えようよ。君の可能性を育てようよ」

藤田は身を乗り出して絨毯の上に座っている涼を励ました。

「水木涼！」

「西岡先生がおっしゃっている事は分かるわ。でもそれは私の可能性ではないのよ。私がこの家で育ったから皆と違ったものの見方や感じ方をするだけなのよ。私は、何の価値もないわ」

「水木、その、この家で育ったからという理由を話してくれないか」

「この家に育ったから、人と違った見方や感じ方をする、それが水木涼を育てた可能性だよ。しかし、この家とは何なんだい？」

藤田と二見の真剣な眼差しを受けながら涼は首を左右に振った。

「僕たちは、本当に小さい時からクラスメート、同窓生としてやって来たんじゃないか。水木、一人で苦しんでいないで、進学しないなんて言わないで話してくれよ」

「有難う。でも、どうする事も出来ないの。小さい頃からの様々な出来事が、ここにあふれるほどに積もっていて...それに、この夏の出来事が加算されて、私...だめなの」

涼はここと胸を抑えた。

「もう、だめなの、私。だめなの。それに話すことも出来ないの。話してしまうと、自分が崩れてしまいそうなの。だから話せない」

涼は、うなだれて頭を振った。

「水木涼、僕らに何かしてほしいだろう、僕らは何をしたらいい？」

「もう、何もないの、もう。有難う。私、自分の進路は決めたの。その方がいいの。私は愛されて育てられていない、だから、人を愛する方法が分からない人間だと思うのよ。憎まれて疎まれて、心も体も傷だらけで育てられて...。だから、きっと私は人を傷つけて平然としていられる、そんな大人になると思うの。私は人を傷つけても平気な、そんな人間になるのなら自分が生きることを許さないわ。私が生きることを私自身が認めない。その方が私自身のために良いとおもう。でも...」

涼は唇をかんで黄色に紅葉した藤棚の葉が垂れているテラスへと出た。

藤の葉の黄色と涼が着ているクリーム色のワンピースを傾きかけた太陽のわずかな光が照らしてそれは儚く淡い幻想のようであった。

「でも考えてみればある面では復讐になるわ。でもわかってね、決して復讐では無いの。私が私を認められないだけなの。まだ、誰も憎んでいない今、選んだ進路なの」

涼は藤田と二見に背を向けて、空を見上げながら風を受けていた。

涼がいう復讐では無いということが理解出来なかったがそういう涼の後ろ姿が儚く淋しげだと二人の少年は胸が痛んだ。

「水木涼、この前の...つまり夏休み中の、あの件は？誰が？おじさんもおばさんも、会社へ行っているはずだから、あの件はお祖母さんかい？」

藤田は急かすようにたたみかけた。

涼は、背中を見せたまま頷いた。

「では、小学生の頃、水木は背中全体を紫色に内出血させていた事があったね。あれもお祖母さんなんだね」

二見は、幼い頃の涼の姿を思い出しながら労わるように涼を見上げた。

「あれ、あれは母よ。ねえ、お腹が空いているでしょう。ホットケーキでも食べましょうよ。すこし、待っていてね」

涼の唇の端が微かに笑ったように見えた。

涼は首を傾けて優しく二人を見ると、部屋を横切って出て行った。

「お祖母さんとお母さんの二人から水木は、ずっと虐待を受けていたんだ」

「そんなことは一言も言わずに、水木涼は頑張っていたんだ」

「水木は、この家を出るつもりで大学へ行かないんじゃないか？しかし下宿するとか、手はあるよ」

「ああ...」

二見と藤田は顔を見合わせた。

小学生の頃から、自分達の仲間として、静かに優しい存在でいた涼、自分に与えられた責任をやりこなしながら、静かにクラスの中に場を持っていた涼は、藤田にとっても二見にとっても良きライバルでもあったし掛け替えのない友人でもあったのだ。

その涼と、これからもいい意味で競い合っていきたいと、二人の少年は思っていた。

「涼君は、進学組に変更したかい？」

野上作太郎は、若者らしく、おいしそうに食事をしている息子の敏夫に声をかけた。

ウールの衾に、帯をしめた作太郎は、いつもより遅く学校から帰宅した敏夫に気付き奥から姿を見せた。

「先生も涼ちゃんの頑固さには驚いているよ」

敏夫は、父親が正面に座るのをっ見守っていた。敏夫はこの所藤田や二見たちと交わす情報を父の知らせない方がいいのではないかと思った。

涼が幼い頃から、母親と祖母に虐待されていた事を一その結果である紫色の涼の背中を自分も見たし—また友人から聞いた夏休みの出来事を、父に話したらそれがどのように飛び火して行くか、それを思うと正直に話す勇気がくじけるのだった。

なぜなら、涼が進学をやめたことを父に話した数日後、涼は

「野上さん、私の進路変更のこと、野上さんのお父さんに話したのね。父に親に相談もしないでって叱られてしまった。いずれ話すつもりだったから別に構わないけど、少し、驚いてしまったわ」

と、首をすくめた様子が思い浮かんだのだ。

今、友人たちの間で問題になっている事はもっと深刻な事なので野上は、注意深くなっていた。

「敏夫が中学生の頃、学校で映画鑑賞会があったのだが、敏夫はそこに出席していなかったから知らないかもしれない。一年から三年までの二十人くらいの生徒と、役員の父兄先生方が何人かのものだった」

生徒たちは思い思いに自分が面白く感じたことを語り父兄も先生も意見を述べた。

しかし、涼だけが最後まで意見を述べていなかった。

涼の意見を聞きたいと思った作太郎は、その時教師に水木涼の意見を聞きたいと申し出た。西岡先生から指名された涼が、恥ずかしそうに述べた言葉は大人をさえ感心させる内容だった。

映画は、子だくさんの貧しい炭鉱労働者の子供の日記が元になっていた。

涼の感想は、貧しい父親が自分の家庭より貧しい妹を助けたいと思っているが自分の家も貧しくて、家族に不便な思いをさせているので言い出せない。

それで 家族に内緒で出かける。妻は、何かそわそわと秘密めいている夫に女ができたと思い、後をつけて真相を知る。すると、妻は妹のためなのだから隠さないで話して欲しかった、と、夫をなじり、夫は自分の家も貧しい上に妹のことまで心配かける事なので話せなかった気持ちを打ち明ける。妻は夫を水臭いと悲しんだが、その後妻は、夫の妹の面倒をみる、その暖かさに涙が出た、と言うのだった。

子供たちは、兄弟喧嘩が面白かった、転んだ様子が滑稽だった等と映画を表していたが涼の批評は違っていたのだった。

「そうだね、確かに感動する場面だね。先生、そこを見落としていた」

西岡先生は、頷きながら涼を見詰めた。

その出来事を作太郎は、敏夫に話して聞かせた。

「涼君は何かしら秘めたものを持っている。西岡先生は評論家の道を歩くのが涼君に合っているとおっしゃっていたが私も同じ考えだ。敏夫、涼君に進学するように私も勧めていると伝えてくれ。」

「その話以前も聞いたよ。お父さん、水木のおじさんは涼ちゃんの家でのこと、何か話さない？家での涼ちゃんの立場について」

「別に、どうして？」

「そう、いいんだ、何も話さないなら」

敏夫は、食べ終わった食器を重ねながら、涼にとって進学することが本当に一番いい道なのだろうかと考えた。

小学三年の頃、体育の時間に跳び箱を飛んでマットの上に着地した時に風に揺れたブラウスの中に見えた背中、一面に薄気味悪く紫色に変色していた、あれが母親の仕打ちだなんて。そして、敏夫が見たわけではないが、両手を地で染めて家から飛び出して来たという涼を思うと、涼の希望どうりにした方がよいのでは無いかと敏夫は迷うのだった。

涼の父親は涼が母親と祖母から受けている仕打ちを知らなくはないはずだと敏夫は思った。知っているのにそれを止める事が出来ないのは、どういうことだろう。黙認しているということだろうか。黙認していると言うのなら自分は手を出さないとしても加担していることになる、と敏夫は思った。

「あら、もう食べ終わったの？ごめんね、お祖母ちゃんのお手伝いをしていたものだから。」

母の邦子が居間に入ってきた。

「いいんだよ、お母さん」

「あ、敏夫の部屋にストーブを出しておいたわよ。夜、寒いと言っていたから、風邪、引かないようにね」

邦子は、敏夫の食後のテーブルをかたづけ、台所へと立って行きながら笑顔を向けた。

敏夫は母親の笑顔に笑顔で答えながら涼は母親の笑顔を見ることがあるのだろうか、と思った。

「どうだ、大学へ行く気持ちになったか？」

涼の部屋に、英二が来たのは八時を過ぎてからだった。浴室を出て真っ直ぐ涼の部屋に来たらしく、パジャマ姿で濡れた髪をバスタオルで拭いていた。

涼は、英二を振り返ったが黙って机の上の教科書に視線を伏せた。

「敏夫君のお父さんも心配してたよ。進学するだろう？」

「行きません」

「どうしてだ」

もし、マサ江伯母さんの家から通学させてもらうか、下宿させてもらえるなら、それなら大学に

行きたい。でも、この家からは嫌。この家には居られない。この家以外の所から通学できるのなら...大学に行きたい。そうさせて、お父さん」

涼は、素早く机から離れると英二の足もとに両手をついて頭を下げた。

「お願い、お父さん」

「親がいるのに若い娘が一人暮らしをするのは良くない」

英二は、一括した。

涼は必死に英二を見上げたが、英二は後ろ姿を見せて涼の部屋から出た行った。

父の姿が、後姿が、涼の前に冷たい風を残して遠く、遠く感じられた。涼は、両手を床についたままの姿で父親の後ろ姿を見送りながら「さようなら」と心の中で呟いた。

四章

冬休みの二日目、涼は長崎に居住する祖母、マツからの手紙を受け取った。

マツは、娘の塔子が病弱だったため赤ん坊の涼を五歳まで手塩にかけて育ててくれたのだ。

塔子の生家での涼は伯父や伯母、そして従兄弟たちの中でのびのびと発育した。従兄弟たちにまわり付いて煩がられて泣いた事もあったがそういう時は伯母や祖母が相手をしてくれた。塔子の生家は暖かさと優しさを涼の心に植え付けてくれた。

マツの手紙は、進学を拒む涼の気持ちを尊重しながらも、お母さんの言うことを聞いて大学へ行ったらどうだろうと遠回しに進学を促していた。

涼はマツの手紙をエプロンのポケットに仕舞うと家の仕事に取りかかった。

涼は小学二年の頃からセツの提案で朝食と家の掃除をして登校していた。

学校から帰るとセツの夕食の支度を手伝い、食後は片付けをする。夏休みや冬休みは会社務めの母、塔子に代わって家事に追われる毎日だった。

しかし、その日涼は掃除を妹の美智留と加奈子に任せて外出した。

北西からの風は静かな太陽の微かな温もりを吹き払い、街を乾燥させて吹きすさぶ。

涼は紺色のコートのを立て、その下に白いタートルネックのセーターをのぞかせていた。

足首までの紺色のブーツに紺色のショルダーバックを肩から下げていた。

涼が行き着いた駅前には野上、藤田、二見、田中、そして江藤千秋が揃って笑顔で待っていた。

千秋と涼は小学三年の頃からの親友だったので、藤田は千秋が涼のプライベートの事もよく知っているものと思い夏休み中に涼の身に生じた事を知らせ、子供の頃からの涼の事を尋ねたのだが千秋は何も知らなかった。

「幼い頃から虐められて居たらしいんだよ。水木涼は君に何か相談しなかった？」
そんな事、何も…。でも、そういえば…」

千秋は、涼の家に宿題をしながら泊りに行った時の事を思い出した。

一緒に入浴した時に、涼の体のあちこちに紫色のあざがあった事、首筋に爪で着いたらしいひっかき傷があった事を。

「涼ちゃんどうしたの？」と、数ヶ所のあざを指で触ると笑った涼を千秋は思い出した。

「涼ちゃんは、何も言わずに笑ったの。涼ちゃんは笑ったし私も子供だったからよく分からなかったけど、そうだったのね、あの傷虐待されていたのだわ。でも、何故？」

千秋は、藤田を見上げた。

「涼ちゃんに会いたい、合わなければ」

そんな事があって今日になったのだ。

「ごめんなさい、遅くなって」

涼は仲間を見回しながら走ってきた。

「久しぶりだね、六人がこうして集まるの」

田中は仲間の一人一人を確かめるように見回した。

「中学卒業の時は、月に一度は会おうと約束したのに、一、二度会っただけだったね」

「そうだね、これからはあの約束を守ろうよ」

藤田は、笑いながら自分の毛糸のマフラーを涼の首元にまいた。

「有難う、いいの？寒くない？」

心配げに見上げる涼に、藤田は

「今日は大いに遊ぼうよ。受験勉強中のたった一日の僕らの冬休みだから」

若者たちは、駅のターミナルを、「だるまさんが転んだ」をしながら通り過ぎた。

道路上で影ふみをしながら港に向かった。

港の石のベンチに並んで腰を掛けて、「鈴懸の径」を歌った。

お昼にはレストランで、一人一人がそれぞれ好物を注文して、それを分け合って食事をした。

その日、涼は笑っていた。

仲間に 笑顔を向けていた。

そして 別れ際に

「皆と肩を並べて勉強したいわ。私、一つだけ道が残っていることに気が付いたの。それは 大きな壁だけど、私ぶつかってみる」

と、友人の顔をしっかりと見つめた。

「それは ということ？」

「話合ってみるの、一番問題のお祖母ちゃんと」

「お祖母ちゃんが一番の問題？」

男子たちは顔を見合わせた。あの夏の日、血液を散らしながら格子戸から飛び出して来た涼の姿を思い出していた。

「ええ、私は水木の家で生まれたのではなくて、母の実家の長崎県で生まれたでし

よ。そして五歳まで母の実家で育ってこちらに来たから、お祖母ちゃんは私を孫として愛することが出来ないのだと思うの。だから、つい意地悪するんだと思うの。でも、私、ちゃんと話し合うわね」

涼は仲間を見回した。

「頑張って、涼ちゃん。私たち涼ちゃんを応援するから」

「頑張れ、結果を知らせてよ」

「つい意地悪をする、そんな種類の問題ではないだろう。水木涼、もしかしたら水木涼は今頃こうして僕たちの目の前に立っていない、そんな事になっていたかも知れないのだよ。つい、なんて問題ではないよ」

「そうだよ、事態を真っ直ぐに見なければ。話し合うのなら物事を正直に見て話し合うべきだよ」

野上は、念を押すように涼の目を見た。

駅から家までの道のりを涼は歩いて帰った。

風は昼間よりも冷たく、寒さに体が硬くなった。

その冷たい夜気の中を自分の心を踏み固めるように涼は一步一步しっかりと歩いて行った。

小学生になる前から、祖母のセツが何を言っても口答えをせず何でも「はい、はい」と従うように両親に言われて来た。

例えば子供の涼であっても、口答えをするならお祖母さんは家庭内の事がある事ない事近所の人や親類に話しまわって家庭の中が乱れるから、ただ我慢するように言われてきた。だから全く無抵抗で過ごしてきた。

しかしその戒律を破るのだ、と涼は思った。

自分の言葉を祖母がどのように受け取るか、両親がどのように出るか涼は不安だった。不安だったが自分がどのように生きるのか、それが関係しているのだから必要なことだと涼は思った。

問題は現実よりも悪化するかもしれない、その時には今、考えていることを実行するだけだと涼は思った。

あれは憎しみ、しかも人としてあれ以上の憎しみがあるだろうか？

涼は、夏の日あの日の出来事を考えた。

二人の妹と家の掃除を終えて、汗を流しながら水を飲むために台所へ行った時の事、流し台の前に祖母が立っていたのでその後ろを通して裏玄関の内側仕切りのポリバケツのゴミを捨てたか確かめた。ポリバケツのゴミは捨ててあった。

涼が体を起こし台所へ上がろうとした時

「お前を殺して自分も死ぬか、牢屋に入った方がよほどいい」

と、声を張り上げた祖母は涼に包丁を打ち下ろしてきた。

涼は、これは何？と思いながら振り下ろされる包丁を避けようと、思わずかざした左手の平に熱いのか、痛いのか分からない、あるいはその両方の衝撃が突き刺さった。

涼は足を踏み外し、タイル張りの床に転んだ。

お祖母ちゃんは、次にどうする？と祖母を見上げると蒼白な祖母の顔が涼には恐ろしいものに見えた。

信じられない、こんなこと、信じられない...涼は祖母の次の行動に見入りながらゆっくりと立ち上がった。

祖母は庖丁を流しの中に投げ入れた。

それを見た瞬間、涼は裏玄関から外へ飛び出した。

熱い太陽が照りつけて、涼は思わず顔を背けた。

格子戸を出ると、そこには見覚えのある少年の顔があった。驚いて声も出ないといった表情の三人の少年は、戸惑いを隠せず涼を目で追った。

涼は、藤田、田中、二見を確かに目に留めたがまるで見なかったかのように三人の前を駆け抜けていった。

「水木」

引き留めるかのような声が涼の耳を掠めたが、涼は桜並木を傷ついた手をもう一方の手でかばっ

て走り、角を左手に海の方へ折れた。

前方に松の緑が海を遮るように立ち並んでいた。

何軒かの屋敷の前を通り抜け海の広場に出ると、そこは松の木陰で潮の香が全身を覆った。その潮の香りの中を一気に砂浜を、駆け降りて涼は波打ち際に両膝をついて血だらけの両手を海水の中に浸した。

朝風の時間なのだろうか、何時もは白い波頭を煌めかせている波が、静かな音で砂の上を滑っていた。

何という事、信じられない。人間としてこれは憎しみ...お祖母ちゃんはこれほどの憎しみを私に持っていた。

海水の中に赤い血が、それはまるで 父が大気の中に煙草の煙をくゆらせるように流れ出ては波に消されていた。

きっと、この傷は海の水が沁みて痛いに違いない。でも、心の痛みが大きくて傷の痛みを感じさせないのだった。

心の痛みは泣く事ではなくまるで獣のように叫ばせているとあの時涼は思った。

私がいる場所はある家にはない。でも、友人と共に学びたいことはまだ沢山ある。

祖母と話し合うことで解決できる問題があるはずだから詫びるところは詫びよう、そうすれば、きつとうまくいく。いえ、祖母と話し合うことは両親の意志に反することだから問題は悪くなるかもしれない。

悪くなるかも知れないけれど、何もしないで、自分の人生の方向をまげてしまうよりも行動してみる価値は有るし権利も有るはず、と涼は思った。私は、父と母のロボットではない。私にも感情は有るし生きる道確かめる事は許されるはずだ。

幼い頃無理に口の中に唐辛子を入れられたことから始まって、学校から帰ると、外出用の服に着替えさせられて その服を鋏で切り刻まれて道路に追い立てられて泣いた事、あの時の怖さを涼は忘れられなかった。

ある時は、学校から帰ると、母が娘に対してそのような形相が出来るのだろうかと思いたくなる表情で涼の帰りを待ち侘びていたかのように塔子のしつけを超えた仕打ちは セツが美智留、加奈子、宏の悪戯を涼の仕業として言いつけるからだった。

「涼は知らない、だって今学校から帰ったばかりでしょ？」と、訴えても通じなかった悲しみ、それが何度繰り返された事か...

そうした水木の家での年月に、私は人を恨むことを知り、嫌うことを知り、悲しい 淋しいという気持ちも知った。怒りも、そして反抗心ときたら心が燃え立つほどになってしまった。気持ちが汚れて、心が汚れて生きていることが苦しいと涼は思った。

しかも そうした感情を自分の家族から教えられたことが何より悲しいと涼は思った。様々な出来事を思い出しながら、水木の家は私を否定してきたと涼は思った。

あの家では私はやって行けない、と思うが進学するにはその起点となるのが水木の家でしか許されないのであれば、祖母との関係を良くするしかない。そうするには、祖母と話し合う必要があると涼は決意した。

しかし、涼はセツと話し合うことで両親から叱られる以上の致命的な痛手を行けるとは思いもしなかった。

門灯も、玄関の明かりも涼の帰りを待ってはいなかった。

青い夕方の光を踏んで涼は玄関にたどり着き、家の中に入った

玄関の中も暗く、感覚で壁のスイッチを入れて明かりをつけブーツを下駄箱の中に仕舞った。

ベツトルームのクローゼットにコートを掛けて涼は両親の部屋の方を見た。

庭を隔てたその部屋は 暗く人の気配はなかった。

祖母にも両親にも絶対に服従しなければならないこの家で、しかも、何があっても祖母に言い逆らってはならないと忠告されている水木の家で祖母の不条理な言動を提議することは、結果として大問題が生じるかも知れない。両親は激怒するだろうと涼は考えながら正面の暗い部屋に目を据えていた。

そして自分もいつか祖母と母のように人を傷つけて平気でいられる人間になるだろう。私がそんな人間になるのなら、私は自分が生きることを許さない、と涼は常に考えていたがその夜は切実にそう思った。

人に意地悪をして傷つけて生きる、そんな生き方しかできないのなら、生きている価値があるとは思えない、それが涼の気持ちだった。涼は祖母との話し合いは自分の人生を左右するものだ、と思いながら窓辺を離れ、食堂へ向かった。

食堂では、祖母と塔子が塔子の実家から送られてきた小豆を新聞紙の上で選り分けていた。

涼は祖母と塔子が作業をしているテーブルの端に立った。

「おばあちゃん、話をしたいの」

祖母と塔子が同時に涼に視線を向けた。

「話、どう切り出したらよいのか分からないので、いきなり問題に入ってしまうけど…」

涼は塔子と祖母を見比べた。

「おばあちゃんは、私が長崎からこの家に帰った時から私にいろいろ…辛く当たって来たわよね」

塔子も祖母も 黙って仕事を続けていた。しかし塔子の表情は俄かに緊張していた。

「私は お祖母ちゃんと仲良くしたいの。大人のお祖母ちゃんが孫の私に理由もなく意地悪をするとは思えないの。私がお祖母ちゃんに何かお祖母ちゃんが嫌な事をしたからでしょ？私、お祖母ちゃんにどんな悪いことをしたの？教えてください。私、どんな事でも改めるわ。そしてちゃんと謝りたいの。私は、お祖母ちゃんにどんな悪いことをしたんですか？」

祖母は黙ったまま小豆を新聞紙の上で転がしながら、二つの小さな山に分けていた。

「おばあちゃん、言ってください。私が小学生の頃お祖母ちゃんは、爪で私をひっかいて顔や首や手や胸に傷をつけたでしょ。教科書や辞書を隠したり・・・色々な事が有ったわ。私はお祖母ちゃんに何をしたの？何もしないのに、あんなに様々な意地悪が出来るなんてとても思えないの。言ってください、私は何をしたの、おばあちゃんに」

涼の目から、涙がこぼれ落ちた。

「おばあちゃんは、よく病気をしたわ。その時私は出来る限りのことをしたつもりよ。薬を飲む時、トイレに行く時、食事を運んだり、背中をさすってあげたり、お祖母ちゃんも私を頼りにしてくれたでしょ。私は何時もそうよ、何時もお祖母ちゃんが元気になったら仲良くなれると信じて一生懸命だったのよ。でも、元気になると病気の時のお祖母ちゃんはどこかに消えてやはり意地悪なお祖母ちゃんが私の前にいるのよ。私が進学を選ぶと、この家から通学することしか許されないの。この家に居るには家族が仲良くなければとても居られない。私がクシャミをしても背伸びをしても文句を言われる。この水木の家の空気中に見えない針があるように思うの。呼吸することさえ怖いと思うの。おばあちゃん...」

その時だった。

「この家に頭のおかしい者が居る。頭のおかしい者が何か言っているわ。この子は何を言って入る事やら、出て行きなさい。お前なんか家の子ではないわ。」と、塔子は苦々しく唇を歪めて言った。

涼にとって 母親としての塔子の言葉は信じられないものだった。平和にすむとは思わなかった。しかしまさか狂気呼ばわりされるとは考えもしないことだった。

水木の家に居る事に常に不確かさ感じていた涼は母親の言葉に、足元が崩れて消えた気がした。

「分かりました、お母さん。お母さんからそういう言葉を聞かされるとは思わなかった。もう二度と大学へ行けなんて言わないで。お父さんにも大学へ行けなんて言わせないで。これで終わりです。もう、終わり」

涼は塔子を見据えた。塔子を見据えながら、私の目はいつか母が言った「私をバカにしている目」をしているだろう、と思った。

涼は塔子と何も語らない祖母を背を向けて食堂を出た。

涼は、塔子に対して激しい絶望と怒りを感じた。それは、心の中に納まりかねて全身を震えさせた。その震えは立って居ることも出来ないくらいのもので、涼は机の上に突っ伏してしまった。それでも体はガクガクと震えた。

何という事、頭のおかし者だなんて...お母さんに対する気持ち、今の気持ち、これが憎しみかも知れない、と涼は思った。

意見を述べる事も許されなかった家で祖母と話し合うことが、どのような結果を生み出すか考えなかった訳ではなかった。しかし、母親から頭のおかしい者呼ばわりされるとは思いもよらなかった。

涼は机の上に置いてあった藤田から借りたマフラーに手を伸ばして引き寄せた。そして、柔らかなマフラーを震える手でひしと顔に押し当てた。そのマフラーだけが涼に人の心の温かさを伝えてくれるのだった。

「珍しいな」

英二は明かりが消えている涼の部屋を見ていた。

「もう、寝たのかい、涼は」

「あなたが帰ってくる少し前に、涼はお祖母ちゃんが涼を虐める理由を訪ねていたわ。いろいろと言っていたわ」

「止めたりしなかっただろうね。言いたいだけ言わせてやっただろうね」

英二は塔子の方に近づいて行った。

「ええ・・・」

「言わせてやれ、あの子だって相当に耐えているんだ。たまには強く出るのもいい」

英二は座卓の前に座り、塔子が入れたお茶をすすった。

「しかし、涼がこんなに早く明かりを消していることは今までにない事だよ。具合でも悪いのではないか？」

英二は再び立ち上がり、障子を開けると廊下に出て行った。障子で囲まれた中央の部屋の角を曲がって玄関の見える廊下に出ると、次女的美智留と三女の加奈子が入浴をすませ二階へ行くところであった。

「お父さん、お休みなさい」

「湯冷めしないうちに寝るんだよ」

「はあい、お休みなさい」

「宏は？」

「今夜もお祖母ちゃんと眠るんだって、お祖母ちゃんの部屋よ」

美智留と加奈子は階段を駆け上った。

英二は、涼の部屋のドアをノックした。

返事がなかったが、彼はドアを開き、暗い部屋の明かりをつけた。

「どうした？体の調子でも悪いのか？」

「大丈夫、疲れただけ」

かすれた声で涼は答えた。

机の上に両腕を重ね、その上に顔を伏せたままだった。

「進学する決意はついたのか？」

野上さんも心配しているよ。行くんだよ、大学」

「...」

英二は、返事をしない涼の背中を確かめるように見やってドアを閉めた。

その時、涼が返事をしなかった事は、進学するのだと英二は思い込んでいた。

空気は寒気のためにキーンと鋭く冴え渡り、空は高く高く澄みきっている。

涼は、冬枯れの藤棚のテラスから深い青の空を見上げた

空しい、全てが空しい...水木の家すべての人々が偽り、全てが空しいと涼は思った。今迄、涼の家族に対する最低限の言葉「おはよう」も、食事の時の「いただきます」も「お休みなさい」も、あの夜以来、祖母と対話を持とうとしたあの日以来ぶつんと途切れてしまっていた。

業者に家の大掃除を頼んで以来、涼は妹達とも言葉を交わすことなく家の中の仕事を、きびきびとこなして来た。

英二と塔子が年末年始の休暇に入ってもこれといった家の仕事がないくらいに、きちんとした家事の仕様であった。

食堂の朝の片付けを終える頃、電話のベルが鳴り、塔子が受話器を取った。

「あ、千秋さん、涼に変わるわね」

塔子は涼に視線を向けていたが、「あなたによ」と、涼に受話器を向けた。

涼は、黙って受話器を受け取った。

いつもの涼なら必ず言う筈の「ありがとう」の声もなく視線を合わせる事もなかった。

「ちーちゃん？」

「今、皆が家に来ているの。藤田君と田中君と二見君、それに野上君よ。涼ちゃん、お祖母ちゃんと話し合ったの？どうだった？これから出てこれる？」

「ちょっと待って」

涼は受話器に言葉をかけると塔子の方を見た。

「ねえ、忙しいと思うんだけど私、出かけたいの」

「千秋さんと？もう、あとお正月のお料理だけだから、いいわよ」

「ありがとう」

塔子は期限がよかった。涼に笑顔を向けていた。

このところ涼は何も話さず、返事もしないが家の事はよくやってくれていた。

良き働き手である涼が親友の千秋から誘いを受けたのだから、喜んで出してあげたい、と塔子の気持ちだった。しかも、会社務めの塔子が日頃、家事におわれることがないのは涼が助けてくれるからだと思って居たので、連休で家に居る時位は涼を自由にしてあげたいという思いもあった。

涼の目と塔子の視線が触れ合った。涼の眼差しはじっと静かに塔子の目をとらえていた。涼の大きな目に滲み浮かんだ涙が塔子の目の前で、頬にあふれて流れ落ちた。

「涼...」塔子の唇が、ふと不安げにその名を呼んだ。

その時の涼は、悲しみと孤独に疲れ切った頼りなげな影のようだった。

塔子をじっと見つめる涼の目は、あくまでも悲しげだったが塔子に語りかける心を写し出してはいなかった。涼は、塔子の目をじっと見つめたままゆっくりと体の向きを変え、そして背を向けた。

「涼…」何か冷たい白い影が涼の姿を覆い遠ざけているかのようだ。

涼が、塔子から飛び去ったような冷ややかな空虚さがあたりに漂ったのを塔子は感じた。もう、涼は私を母親だと思ってない、塔子の胸に冷たい風がよぎった。その風は突然塔子の暗く淀んだ深みに切り裂くような痛みを突き刺した。

酷い事をしてきた、とても残忍なことをしてきた、心の痛みにあふれと揺らいだ体を塔子はテーブルに両手をついて支えた。やたらに涼を打っている自分の姿が思い出された。髪の毛を掴んで部屋の中を引きずり回した後、指に絡んだ涼の髪の毛を思い出した。そして塔子の指に絡みついた自分の髪の毛を見た涼の怯えた顔が熱い苦しみとなって、塔子の胸に浮かんだ。打たれ続ける涼があえぎながら、やめて、息が出来ない、と訴えたがそれでも涼の小さい体を打ち続けた事。

肩からお尻まで内出血して紫色に腫れ上がっていた涼の背中……。

祖母からも、ましてや母親からも残酷な仕打ちを受けて育ったのだ。この家に居たくないと言う涼の気持ちは当然だ、と塔子は思った。両手両足を縛られて泣いていた幼い涼の小さな姿、あれこれと、思い出しながら自分に注がれる涼の視線の冷たさが、もう、取り返しがつかないことを物語っていると塔子は呼吸が胃の奥で絡む息苦しさにあえいだ。

「それで、話し合えたの？お祖母さんと」

藤田は、涼から返して貰ったマフラーをもう一度涼の首元に巻いてやった。

涼は、蒼白な顔で頷いた。

「どうだった？」

千秋をはじめ、仲間の顔が真剣に涼に注がれた。

「私の言葉に祖母は何も、一言も答えなかったわ。母が…」

「お母さんが、何て？」

「私の事を頭のおかしい者だって。頭のおかしい者が何か喚いているって」

涼は、そう言いながら空しく自分を笑った。

「それだけ、以上。もう、いいの。私の物語は終わりです」

涼は、千秋、野上、藤田、二見、田中の顔を一人ずつゆっくりと見つめた。

「涼ちゃん、おじさんは、おじさんはなんて？」

野上は 涼を見た。

「父は…知らないわ」

「どうして知らないの。父親だよ、知っていないと」

「いいの。私は愛されて育てられていないから、人を愛する方法を知らないと思うの。人を愛せないで居る事や、優しさと同情心がなくて生きるって人として美しい生き方ではないと思うの。私は、いつか祖母と母のようにきっと人を憎み傷つけて生きる、そんな人間になるのではないかと思うの。そんな人間になってまで生きているって悲しいと思わない？人間として祖母のようなあんな生き方はしたくない。人を傷つけて平然と生きて行ける、そんな人間になるのは嫌よ。そ

んな生き方しか出来ないのなら私は生きていたくない。自分に生きることを許さないわ」

「水木は大丈夫だよ。そんな人間にはなれないよ」

「そうだよ、水木」

「涼ちゃんは、いつも優しいわ。それは涼ちゃんが痛みを知っているからなのね。痛みを知っているから優しい人は、決して意地悪な人にはなれないわ」

千秋は涼の肩を抱き寄せた。小学生の頃、おなじクラスになった時からお互いの家に泊まりながら宿題をする、そんな友人だった千秋と涼、それなのに涼を知っているつもりで全く知らない部分、それが、涼をどれ程苦しめていたのか、千秋は自分を不甲斐ない友人だったと思った。

もし、この夏の出来事を藤田たちが目撃していなかったら、自分は涼の暗い面を知る由もなかっただろう。涼は夏休みの出来事も自分の中に納めて黙っていただろう。

「涼ちゃんのバカ。何も話してくれないで、何も教えてくれないで、一人で泣いて一人でこらえて来たのね」

千秋の反対側から野上が涼に寄り添い、そして肩を引き寄せた。

藤田も田中も二見も野上と千秋そして涼の肩に腕を回し、涼を中心に優しい、温かな輪を組んでいた。

公園の中を通り近道をする人影が、彼らを不思議そうに見ながら通り過ぎて行った。

涼がとにかく平安の中で幸せで居る事、それが若者たちの気持ちだった。涼が進学してもしなくても、重要なのは涼が幸福かどうか、ということに重きを置いた答えが提出された。

「いずれにしても水木が一番いいと思った道を行けばいいよ」

田中は野上の肩ごしの涼を見た。

「ありがとう」涼の声が重かった。

街の小さな児童公園で落ち会って、別れるときは六人の行きつけの書店だった。

「お願いがあるの。私に一輪、白い花をください。一輪ずつ白い花が欲しいの」

書店の店先で、涼はうつむいてそれからもう一度、仲間の顔をかみしめるように一人一人を見つめた。

涼の大きな目に、うっすらと光が宿った。

「分かった、今度会う時に持って来るよ」

「何の花が好きなの？」

「何でも、白い花なら」

「涼ちゃんは白い花が好きだったわね」

「じゃあ、また」

「風邪に気をつけろよ」

六人の仲間はそれぞれ笑顔で振りむきながら、手を振って去って行った。

皆、夕暮れの師走の人波の中に紛れて行った。

涼は涙ぐんで友人の姿が見えなくなるまで見送っていたが、やがてゆっくりと歩きだした。

街角には、それぞれ何処かに通じる道がある。

誰もが、自分が行く目的に沿って道を選んで先を急ぐ。

涼も、自分が決定した道を選んで海へと向かった。
涙は北からの風に、冷たくなって頬を落ちて行った。

涼の部屋は、朝まで人が住んでいたなんて信じられないほど整理されていた。
本棚も背表紙が揃えられ、デコボコが一か所も見られなかった。
ベッドも少しの乱れもなく整えられ、カバーがきちんと掛けられていた。
本棚の角、机の角がなぜか尖って見える淋しい冷たい部屋であった。
間もなく、水木家では夕食の時間だ。

早めに夕食の用意が出来た塔子は正月用の玄関の花が気になって、玄関まで行きかけて、ふと足を止めた。涼の部屋に通じる渡り廊下が暗い。

涼の部屋に行ったのは、何時だっただろう。

もう、何か月も渡り廊下を歩いた事がない事を思った。

塔子は寒いと思いながら明かりをつけ、渡り廊下に足を踏み入れた。

ガラス戸を藤の残り葉が、かすかに触れる音がした。

「涼は帰って来たのか？」

後ろから英二の声が追ってきた。

「いいえ、まだ」

塔子は、英二を振り向いて

「涼の部屋に何か月も入っていないことを思って…。あの子はちゃんと掃除をしているのかしら」

塔子は涼の部屋の明かりを灯してドアを開いた。

「まあ、きれいに整理してあるわ」

塔子は笑顔で部屋中を見回した。

しかし、英二は涼の部屋を冷たいくらいに静かで、呼吸さえしていないと感じ唖然とした。普通ではない緊張が部屋中に満ちている、と英二は感じた。

この家の中で、涼という娘の存在の価値が何を示しているのか、いきなり突きつけられた気がして英二は息を呑んだ。

涼は、足を止めて左手の桜並木を見た。花の時期には道の中央で重なり合う花の枝が行きかう人々を豊かに覆い包むのに、今は細い梢が冷たい風に吹きすさぶ。

その桜並木に、水木家の格子戸がある。

涼は、街頭に浮かび出た水木の格子戸を見ていたが、ずっと顔を背けて海へと向かった。

海からの冷たい風が、涼の全身を押しつけるように吹き抜けていく。

家族、その小さな社会の中でさえ愛されなかった、と涼は思った。

今さら、祖母や母の事など、どうでもいい、と涼は思った。

ただ、祖母のように生きたくない。

母のような生き方はしたくない。

でも、あの人たちの中で育てられた私は、母や、祖母と同じ生き方をするに違いない。

理性では、あの人たちの生き方を否定しても、感情ではどうだろう。感情を抑える事が出来るのだろうか....。

ああ、お母さん、私が生まれたという事は何なのですか？

私は何なの、お母さんにとって一体何なの？

涼は、生まれた事も、生きて来た事も全てを消してしまいたかった。

水木の家での自分は無駄な人間なのだ、と涼は、小学生の頃から思っていた。

何のために生まれたの？生まれた意味がないではないか....。

風の中に、重々しい波の音がする。

正面には、月が煌煌と輝き、その光の中は、空の青さがうかがえるのではないかと思えるほどに明るい。

涼は一段と高い松の木立の中を通り、砂浜の冬枯れの草の上に立った。

月の光が、海面に煌めき揺れて、涼の前へ道を差し伸べていた。

あの、煌めく道を渡って、月へ行く....。

涼は、藤田のマフラーを首から外し、それをきちんと畳んで、その間に、バッグから取り出したメモを差しはさんで、草の上に置いた。

メモには、野上、藤田、二見、田中、そして千秋の名前が並べてあり、

私を、ありがとう。

ごめんなさい。

と、記されてあった。

それが涼の遺書の全てであった。

しかし、涼は、先程、友達達に、祖母と母の間にあって、自分は母と祖母のように人を憎んで傷つけて生きると思う。そんな私が生きる事を、私は認めない、と言った。それが遺書代わりに話したつもりだった。

涼は、コートを脱いで、きちんと畳んで枯れた草原の上に置き、その上に藤田のマフラーとバッグを重ね直した。

靴を海に向けてコートの前に整えると、白いソックスで砂の上を真っ直ぐに海へ進んだ。

海は、涼の行く手に黄金色の月の影を細い道のようにキラキラと煌めかせながら、うねり膨らみして揺れながら白い波頭を翻し砂浜に打ち砕くだけ砂の上をすべるように走って来て、また、すべるように去って次の波の中に吞まれていく。

涼は、深みへ深みへと進んで行った。

年が変わろうとする冬の海の中へ沖を目ざして、涼の姿は少しずつ波の中へ沈んでいった。

そして、突然、涼の姿は海の中に消えた。

切り落としの深みに足をとられた涼は、月の光が輝く波の間に、二度と姿を現すことはなかった。

月は、何事もなかったように、海の上に光を散らし、波も何事もなかったように、ゆるやかに

揺れる月の光を照り返していた。

ただ、主人を失ったコートとバッグがじっと月の煌めく海を見ていた。

1章

英二は、冷たく感じられる程に整理された涼の部屋で、涼が残した日記を読み終えた。

日記は小学二年の終わり頃から記されていた。

体の中心を貫いていた支えが抜け落ちたような頼りなさが、英二を捕えていた。

英二を捕える不確かさはあの年末の夜、涼の遺品が海の広場で発見された時からであった。涼の帰りが遅いと気にしていた英二と塔子の所に「水木涼さんのお宅はこちらですね」と、警官が玄関に立って

「このバックの中に学生証が有りまして…。

このバックと共に、衣類と靴が海岸に重ねて置いてありまして、家族の方に確かめて頂きたいのです」

と、紺色のショルダーバックと、涼の学生証が差し出されたあの時、英二は嘘だ、と即座に警察官の言葉を心の中で否定した。嘘だ。しかし、涼の部屋に漂うあの冷たいほどの孤独感、あの答えがこれなのか、と英二は警察官の言葉を強く否定することが出来なかった。あの時に英二は体の中心が崩れるのを感じた。

とても立って居られない、しかし英二は警察官よりも早く海に向かって走った。

広場に行くと海岸の周りにも海上にもいくつもの照明が行き廻っていた。

「足跡がここから…」

と、年配の警官が涼の靴から海の方を指で示しながら、懐中電灯の光の中に足跡を映し出した。

少し遅れてきた塔子は警官に、涼のコートやマフラーを示されると、涼！なぜ？と遺品の上に倒れこむように抱きかかえた。

英二は波打ち際まで下りて暗い海に目を凝らしていた。

波の上にはサーチライトを海上に照らしている船と、少し前に涼が見た月の光が揺らいでいた。

結局、涼は発見されないまま新しい年を迎え、すでに一週間が過ぎていた。

水木の家から涼の姿がなくなって、家の中はヒタヒタとした静けさが足元に漂うようであった。

三学期が始まり子供たちは元気なく家を出て行き、塔子とセツは無言のまま家の仕事をしていた。セツは台所の片付けを、塔子は洗濯などや浴室ただ、惰性で済ませているという感じだった。

塔子の脳裏には江藤千秋から電話があって出かけてもいい？と塔子を見たときの涼の姿が離れなかった。

「いいわよ、行ってらっしゃい」

と、涼に笑顔を向けると、涼のあの大きな目にみるみる涙が盛り上がって流れ落ちた。あの涙はさようならという意味だったのだ。

塔子は心臓が誰かに握り遊ばれて居る様な痛みと悲しさが、喉を突き破って溢れそうなのをやっとの思いで耐えていた。

もう、この家に涼が居ない、どうして？「ありがとう」出掛けてもいいという許可を受けて涼が言った言葉、ありがとう、それが最後に私に向けられた言葉だった。

それに、あの目にあふれた涙は何の意志も伝えてはくれなかった。

ありがとう、あの言葉もあくまでも外出を許されたことに対する「ありがとう」であって、他の何も意味してなかった。

すでに死を決意していた筈なのにそれだけの言葉しか無かったの？

涼にとって母親の私は何なの？あなたにとって私は何だったの？

塔子は心臓を引きちぎられる思いだった。

しかし、塔子は知らない。塔子が涼にとって私は何なのかと疑問を持ったように涼も母親である塔子に、自分はお母さんにとって何なのかいつも心の中で尋ねていたことを。

英二は涼の部屋の藤棚のベランダのガラス戸に立って、冷たい風が唸りを上げながら吹き抜ける庭を眺めていた。涼もこの景色を毎日見ていた筈だと英二は思った。

庭石のあちこちに木立が並び、梢が寒々と空に延びている。

その庭を隔てた正面に、英二夫婦の部屋が見える。

この部屋は、家の中から隔絶されていると英二は思った。

涼の部屋は英二の父、健十郎が書斎として愛用していた。

健十郎が他界した後その部屋にセツが入ったがセツは淋しくて嫌いだと言って別の部屋に変わった時、涼がこの部屋を好んだので涼を住まわせる事にした。涼がこの部屋に入りたがったのは、この部屋が家族から遠い部屋である事を察しこの部屋で、自分を守ろうとしたのでは無いかと英二は考えた。

この部屋だと、夕食後誰にも会わないで済む。入浴も洗面もドアから外へ出る必要がないし人に接する事も無いのだ。

しかし、涼は自分を守ることが出来なかった、と英二は思った。

青ざめてすっかりやつれた英二はガラス戸を離れ、涼の机に戻った。

「美智留と加奈子と三人でゲームをして遊んでいると、お祖母ちゃんは美智留と加奈子に部屋においで、と言う。私もついていくとお祖母ちゃんは、涼を呼んだ覚えはないという。どうして私はだめなの。悲しかった。こういう気持ちをみじめと言うのかしら、淋しい」と、涼の日記にあった。

「真ん中の、大きな部屋で妹達と四人で夏休みの宿題をした。私は終わったので両手を上げて背伸びをしたらお祖母ちゃんに見つとも無いと叱られた。みっちゃん達は背伸びをしても叱られないのにどうして私は叱られるの、くしゃみをしてもあくびをしてもいつも私だけが叱られる。

別に、お行儀が悪い事ではないと思う」

他から見ていて何でもないように思っ居たが、当人にしてみれば子供間の差別だったのだと、英二は思った。子供は一つ一つが新しい経験でその一つ一つがほかの子供との扱いが違うと確かに差別なのだ。

それから後の涼の日記にはそうした日々の行動の否定的な扱いを「誰もが自然にすることを私がすると悪い事だというのなら、私の存在を否定している。私は居るべきでは無いということだ」と、記されていた。

涼は、母さんと塔子から自分を守るためにこんなに淋しい部屋を選んだのだ。

英二の頬を、またも涙が滑った。

「私がお祖母ちゃんとお母さんにされている事は、二人とも自分にして欲しいとは思わないと思う。だから自分にして貰いたくない事は人にもしてはいけない、そして自分にしてほしい事は人にもしなければならない。こんな法律が有って、皆がこの法律を守れたら人は皆仲良しで、幸せで争い何て無いと思う」

涼のこの言葉が、英二の胸に切なく留まった。涼の願いのように英二は思った。

自分は涼にとって、いい父親だと思っていた。

しかし、そうでは無かったことを思い知らされた。涼の心について全くと言っていいほどに何も知らなかったのだ。

「おばあちゃんに殺されそうになって、涼ちゃんは左手に傷を負った、そんな家に僕だって居られないです。涼ちゃんを殺そうとする人がいる家に、どうして涼ちゃんを引き留めたんですか。どうして涼ちゃんが好きなように認めなかったのですか？」

涼が命を絶った夜、共に涼を探索してくれた若者たちが、涼は発見されないだろうという見解が警察から出されて、朝日が昇り始めた海岸で泣いて訴えた言葉で自分の家庭でそのような事件があった事を、初めて知ったのだった。そういえばこの夏、涼は左手に長いこと包帯を巻いていた。

塔子が、涼は自分に何も相談しないし何も話してくれないと嘆いていたが、自分にも同じだった。そんな重大な事でさえ訴える気持ちが無かったとは一。

しかし、そうさせたのは私だ、と英二は思った。

「お祖母さんが何をしても、何を言っても口答えをしたり怒らせる様な事を言っはいけない。そうでないとお祖母ちゃんは家の事、お母さんの事などいろいろと親類や近所の人に言って回っお父さんもお母さんも大変な思いをすることに成るから、じっとお我慢してほしいんだ」と何度も何度も言い聞かせてきた。その結果が、涼の自殺に繋がってしまった。

涼の友人たちが悔しがって訴えた言葉を、涼も本当は親に助けを求めたかっただろうに、しかし、そうできないように私たち親が差し止めて来たのだ、と英二は思った。

ああ、母さん、母さんがもっと違った人だったら…。英二の胸の中に昔セツに抱いた激しい憤りが、ふつつつと甦って来るのだった。

2章

英二と塔子は、ある会社の同じ部に勤務していた。

英二は塔子のユーモアのセンスと明朗な性質に引かれ、塔子は英二の真面目さと堀の深い端正な顔立ちに胸をときめかせていた。

二人は愛し合うようになった。が、英二はやがて海外勤務を命じられた。

塔子は身ごもりしかも肋膜炎を患っていた。単身赴任の英二は塔子お家に連れて帰り入籍させた。父の健十郎は理解してくれたが、母のセツはあくまでも塔子を拒んだ。

セツの言い分は

「どこの馬の骨か分からない女を、しかも結婚前に妊娠するようなふしだらな女を水木の嫁に迎える訳には行かない」と言うのだった。

しかし英二は塔子を水木家に住ませ、従姉にあたる植田マサ江夫婦に塔子を頼み、日本を発った。

マサ江は、健十郎の姉の娘であった。一人っ子の英二は幼い頃からマサ江を、姉さんと呼んで親しんできた。マサ江は、ギリシャ彫刻のダビデのような面立ちと太い首をした背の高い人だ。英二と並んで歩いていると間違いなく姉と弟に見られた。

マサ江が

「二人にはもう赤ちゃんが居るのですから、お母さん喜んであげましょう」と、言う

「いいえ、英二には私が決めた人でなければなりません」

セツは断固とした表情でマサ江から顔をそむけた。

病院のロータリーで車を降りると爽やかな風がマサ江と夫の秋夫を通り過ぎて行った。病院を取り巻く花壇には、ピンクと白のコスモスが風に揺らぎ午後の陽光を心地よさそうに受けていた。マサ江夫婦は入院患者用の出入り口の方に向かった。

入口の受付で、水木塔子を見舞いに来たことを告げると、職員はノートを指でなぞり、塔子の名前を探し当てると

「入院された日に退院なさってます」

と、秋夫とマサ江の顔を見た。

「どういう事ですか」

マサ江の顔が強張った。

「叔母さんだわ。あの人に決まってる」

秋夫はマサ江を制して

「どうしてですか、退院してもよかったのですか」

「いえ、ちょっとお待ちください」

受付の職員は電話を引き寄せてボタンを押した。

そして秋夫の顔を見ながら二言三言話をしていたが、秋夫とマサ江に四回のナースステーションに行くように勧めた。

「婦長が来て欲しいとの事です」

夏の盛りには桜の葉の葉先にも力が漲って居たのに、今、桜並木には薄っすらと秋の黄色い溜め息がかかっている。密に漂う冷ややかな秋の指先の桜並木に一台のタクシーが入ってきて、水木家の格子戸の前に停車した。

車の中から、険しい顔をした秋夫夫婦が降り立ち、二人は急ぎ足で格子戸の中に入って行った。不幸にも、水木の主の健十郎は不在だった。

しかし、そのことに構って居られないほど、秋夫もマサ江も怒り心頭に発していた。

二人は、玄関の畳の上に上がると、塔子の部屋はどこかと慌ただしく声をたてて、出迎えたセツに病人の部屋へ案内させた。

塔子は四方を廊下に囲まれた二間続き、客間とその支度部屋の小さい支度部屋の方に寝ていた。

マサ江は、塔子の枕元にすり寄ると額に手を当てた。塔子の目がすぐるようにマサ江に注がれた。

「先生がおっしゃったとおり熱があるわ。氷枕はどこですか？」

「お母さん、塔子さんは実家に帰します。強引に、勝手に、病人を退院させるなど塔子さんが心配です。もし塔子さんに何か有ったらお腹の子も危なくなる。英二に申し訳が立たない」

秋夫は、襖に手をかけて見ているセツに荒い声を投げた。

秋夫夫婦の計らいで長崎の実家に戻った塔子は、親兄姉の元で療養に専念する事になった。新しい年になって六か月が過ぎて、涼が生まれたが、だからと言って塔子は健康を取り戻した訳ではなかった。まだ床に着いていて人の世話を必要としていた。

マサ江から時々便りがあり、夫婦で二度ほど様子を見に来てくれたが、セツからは電話一本の連絡もなかった。塔子の療養中に生まれ、親の体質を受け継いだのか涼も塔子の、兄や姉の子供たちより病気がちだった。しかしそれでもすくすくと素直に成長していた。

近所の子供たちから、キューピーちゃんと言うニックネームを貰って従兄弟たちの後を追って遊んでいた。

やがて涼が五歳になるという春、英二とセツが塔子と涼を迎えに来た。

ちょうど学校は春休みで高遠家の農家特有の広い庭には、近所の子供たちが遊びに来ていて明るい声が飛び交っていた。

その大勢の子供たちの中でセツと英二はすぐに涼を、見分ける事が出来た。

英二は、荷物を下に置くと両手を開いて

「涼、お父さんだよ」

と、身を屈めた。すると涼は

「こんにちは」

と、首を傾けて英二を見上げて笑った。涼は英二とセツが、一目でわが子と認めたほど英二に似ていた。セツが、塔子と涼を迎えるために高遠家に出向いたのは病に倒れた健十郎と親族の意

見を聞き入れただけの事で塔子を受け入れる気持はみじんもなかった。

「嫁にもらうのに、親が迎えに行かない法がどこにある」と、しつこく説かれて仕方なく来たのである。

塔子と涼を迎えた水木家には、セツの刺々しい声が塔子と涼に絶えず向けられていた。

高遠家とは全く違った雰囲気には涼はすっかり怯えていた。塔子に寄り添いながら涼は高遠に帰ろうとしきりにせがむのだった。

「ねえお母さん、あのお祖母ちゃんはいつも怒っているのね」

涼は塔子の腕に、頬を摺り寄せながらセツの姿を目で追っていた。

ある日、空気が動かない蒸し暑い日、塔子と涼は池の中の鯉を覗いていた。

赤い色を好きな涼は、赤い鯉に大喜びだった。池に架かった小さな木の橋の上に、両膝を着いて「鯉さん遊びましょ」と呼びかける涼を、水木家の中心に当たる廊下に囲まれた二間続きの大きな部屋に横になっていた健十郎が、その病床の中から、久しく忘れていた笑顔を見せて優しい視線を向けた。塔子も義父の笑顔にふっと和む心を感じ水木家に来て初めて優しさと幸せを感じた。義父に信頼の笑みを返した。

「全くうるさいわねえ。子供の教育も出来ないの。病人がいるのに静かにさせなさい。全く、塔子さんは気が利かない」

セツは二階から降りて来て、大きな声で塔子を叱った。

「おばあちゃん、嫌い。お母さんを叱らないで、ばか」

涼は、セツに罵倒されている母が可哀そうで、母を庇いたい一心で塔子にしがみついた。

それが発端だった。涼が、塔子を庇いたくて母さんに投げた言葉が母さんの怒りを買って、...あの日、会社から帰ってくると、格子戸の前に、隣家の園田和子が待っていた。和子は声を潜めて塔子と涼が植田マサ江の家に避難したと、まず青の言葉から語りだした。

「驚かないでくださいね。家の中は目茶目茶になっています。ちょうど回覧板を持って来たのですが、お母様が、お嫁さんとお孫さんを...お父様が、とにかくお二人をマサ江さんのお宅に避難させられましたが...」

「申し訳ありません、驚かせてしまいましたね。申し訳ありません、ホントに」英二は何度も頭を下げて格子戸の中に入った。

見ると、玄関の戸は開いていて上がりから、健十郎がこちらを見ていた。英二の帰りを待っていたのだ。

「何があったのですか」

英二はネクタイを外しながら玄関に入りカバンを上がりに置いた。

「塔子と涼は姉さんの家に行ったって、園田さんが」

二人は健十郎が休んでいる部屋に入った。

「母さんは？」

「自分の身内の所に行ったのだろう。例によって」

「変わらないねえ、全く」

数日後セツは、帰ってきた。機嫌よく笑顔を見せて健十郎の世話をした。

塔子が涼の手引いて、セツの前に座り自分達親子の無礼を詫びたがセツは、一瞥を投げただけで二階へ行った。

健十郎は涼の手を握ってうつむいて座っている塔子に

「もういい、気にするのはよしなさい。私と英二には解かっているから」

「でも、ちゃんとお詫びしないと」

「あの人が、許すと思うかね。もう十分だよ」

そこに、健十郎の着替えを一揃い抱えたセツが、二階から降りてきた。

「本当に、申し訳ありませんでした」

塔子は畳に両手をついて頭を下げた。しかしセツの言葉は無かった。健十郎は塔子に会釈して部屋を去る様に促した。

セツが自分の親や兄弟たち所へ行って、思いつくままに捲し立てて胸のつかえを降ろして帰って来た事を健十郎は察していた。

その日の夕食後の片付けを塔子が涼と語らいながら済ましている間に、健十郎は英二の前でセツに言った。

「塔子も涼も許してあげなさい。涼はまだ幼い子だ、自分の前で母親の悪口を言われれば、悪気なく母親を庇うものだろう。許しなさい。それに、塔子が英二の嫁であることも認めてやろうじゃないか」

しかしセツは健十郎の言葉を、びしっと断った。

涼の言葉が原因で生じた事件の後、英二は涼に

「お祖母ちゃんが涼に何を言っても酷い事をしても、黙って我慢しなさい。そうしないと、お父さんとお母さんがいろいろと辛い思いをする」と、繰り返し繰り返し言い聞かせてきた。

涼の日記では、最初は親のために素直に英二の言葉に聞き従って居た事が分かる。

しかし、時がたち涼が成長するにしたがって親の言葉に疑問を持ち反発していた。

『親って何なんだろう。自分達が平和で傷つかないで居るために、子供に忍耐させる、それで平気で居られる。私にも感情が有るし自尊心も有るのに、お父さんもお母さんも私の内側を無視している』

『今、とても悲しい。私はお母さんと二人だけで居るのが好き。お母さんと二人きりで居る時はお母さんはとても優しいから。長崎に居た時のお母さんになってくれるから。』

でも、そのお母さんが、私と二人きりの時に、

「お母さんが涼に優しくするとお祖母ちゃんがお母さんに意地悪でひどい事を言ったり、したりするの。だからお母さんは涼に冷たくするけど我慢してね」

と、私を見た。お母さんは何を言っているのか分かっていて言ったのかしら。私はお母さんの傍に居るのにスーッと離れて自分が小さく成った様な気がした。お母さんは、私を自分の子供だと思っていないのだと思う。

「いい、い？」と、お母さんは念を押した。そんなの嫌だけど、本当は嫌だけど、でもお祖

母ちゃんに意地悪されるのは可哀相だから、いいよ、と言った。だけど小さい声でしか言えなかった。心が固くなって、重くなって、涙が出そうになった。

『私は、もうおやつは要らない。おやつはもう諦めた。学校がお休みの時などお祖母ちゃんは、私のおやつを妹と弟に分けてあげたり自分が食べたりする。おやつを自分だけ貰えないで悲しんだりするのはみっともないから、私はもうおやつは要らないことに決める。もう、要らない』

『学校の休み時間、クラスメートとゴム飛びをしていたら友人は「涼ちゃん、背中どうしたの？」と心配そうに聞く。私は何の事か解からなかったから黙っていた。

そして体育の時間に跳び箱を飛んだ私を、先生は校庭の隅に私を連れて行って背中を見た。先生は何も言わないで私の手を取ると医務室に連れて行って「どうしたの、一体どうしたの？昨日は何でもなかったのに。先生に見せて」と、先生は体育着をめくって背中を見て、「ごめんね」と言いながら短パンを下げてお尻まで見た。

「どうしたの？何があったの」と聞かれた。私は背中がどうなって居るのか分からないから答えられなかった。でも、お風呂の入るときに鏡に背中を映してみてもびっくりした。肩からお尻まで、紫色に内出血していた。

私は昨日、学校から帰ったら、私がお母さんの鏡台に香水を振りかけた、と言って背中を打たれたのだ。息が止まるかと思う位ぶたれたのだ。

その跡がこんなに気持ちの悪い色になってしまっている。私は思わず怖いと思った。

お母さんを怖いと思った。この家を怖いと思った。

助けて、神様助けて。長崎のお祖母ちゃん、助けて。高遠の家の誰か私を迎えに来て』

3 章

間違っていた。自分はいいい父親だと思っていた。しかし、涼はこんなに傷ついて、こんなに傷つけていた。

我慢しろ、我慢しなさいと言って傷ついた心の苦しみを、親に相談さえ出来なくしていた。この悲しみが小学生のわが子の心に有った事を、英二は初めて知った。

こうした心の傷の重みが重なり合って積もり湯もって、行き場がなくなり、いや、自分達親が行き場を塞いであの子を死に追いやったのだ。

英二は喉につかえている鉛の塊が絶望と言う力になって、呼吸さえ奪われて仕舞いそうに感じた。

『私が生まれた事も、生きて来た事も間違いなのだ。生まれてはいけなかったのに私は生まれたのだ』

涼のこの文字を見たときに、胸が潰れる様な痛みに襲われた。涼は、こんな思いで生きていたのかと、英二は心臓が破れそうな声を出して泣いた。こんな気持ちでこの家に居たのかと英二は父親として身の置き場がないと思いながら男泣きに泣いた。

そう、全ては母さんだ、と英二は思った。

自分と塔子の結婚に反対して、お腹の子供を父親のない子に出来る訳がないと言った、自分と父の健十郎の言葉に狂気のように反論した母のセツだった。

だから重病だった塔子を入院したその日に退院させてしまう事さえしたセツだった。

これが事実自分の母親なのだ、やり場のない気持ちだった。

「涼の日記だ」

英二は、塔子の前にノートの本を差し出した。

「...」

塔子は座卓の上に置かれた涼の日記を見つめて、読むのが怖いと思った。

何かしら、おどおどしている塔子の心の内を読むかのように

「ちゃんと読んでやれ。そして、言い訳や正当化は一切やめてくれ。涼の十八年間の生き方は、そういう甘さで誤魔化されるものではない」

英二は、座卓に肘をつきガックリとうなだれている塔子の前に座り、コーヒーが欲しい、と言った。

塔子は黙って立って行き、やがて二人分のコーヒーを持って来た。

塔子はコーヒーを英二の前にそっと整えた。

英二は、コーヒーを一口含むとそれを、ゆっくりと飲み下した。

「私は苦しいほどに後悔している。涼の全てを理解していなかった。涼の身に何が起きているのか、ある程度しか知らなかった。私自身も、私自身も涼を...。涼は子供だと思っていたが、涼はちゃんと私を見抜いていた。高遠家に君たちを迎えに行った時、庭で遊ぶ涼を見たとき自分の子供はこの子だと直感した。あの時私は湧き上がるような愛情を感じて「お父さんだよ」と言

った。涼は屈託なく「こんにちは」と、笑って私を見上げた。可愛かった。今迄父親を知らないで育ったのだと思うと、なおさら愛おしさがあつた。しかしねえ」

英二は切り裂かれる胸の痛みに深く肩を落とした。

「こちらに来て、涼は私に近づこうともしなかった。君に纏わりついて君の姿が見えないとベソをかいて探し回って、私と手を繋ごうともしなかった」

「それは、高遠の人たちとこの家の人達が全く異なる人たちだからだわ。高遠では子供の失敗や間違いを言い聞かせる躰だったの。そのことがなぜ悪いのか、人にどのような影響を与えるのか言い聞かせる教育だったの。でも水木では叱る、怒る、皮肉を言うその方法なので涼は怯えてしまったのよ。欠伸をしてもクシャミをしても、行儀が悪いとお義母さんにびっしとぶたれるわ。涼にはこの家がただ怖い所だったのよ」

英二は頷いた。

「うん、そうだったのだろう。そのうち涼に妹が二人、弟が一人で来た。その子供たちは、特に三女の加奈子は私が好きで私になついてくれて、私は、子供が増えてから涼を可愛いと感じていない事に気が付いたのだよ。愛していない事に気が付いて、何とか涼を愛そうと努力した。愛したいという気持ちと共に涼には、涼が一番可愛いとか涼を子供の中で誰よりも愛している、と伝えてきた。しかし涼の日記を読んで分かったんだ」 と英二は、日記に目を移した。

「日記には、『お父さんは私の事を姉妹の中で、一番可愛い、一番愛していると言うけれど、それは嘘！愛せないでいるから言葉で愛してる。可愛いと思っていないから、言葉で可愛いと言っている』と、書いてあつた。私の気持ちは見抜かれていたんだよ。小学生の子供に見抜かれていたんだよ。そうとも知らないで、偽りの心を言葉で語り続けていた。涼にとっては淋しく、悲しい事だったと思う。私に言い知れぬ失意を持った事だろう」

英二は、座卓に両肘を付いて顔を覆った。そして肩を震わせて泣いた。

「何よりも、父親として許せないのは、自分たちの立場だけを考えて涼の気持ちこの家での涼の立場を何も思いやれてなかったことだ。

その日記の中に、涼は、所々で、人はどうして自分にして欲しくない事を友人や家族に出来るのだろう。自分にして欲しくない事は同じように他人もして欲しくない筈だと思わないのだろうか、とか、普通自分がして欲しいと思う事は人にしてあげれば、きっと人間は仲良くなれるだろう、と書いてあつた。

その言葉は涼がこの家で育った十三年間に学び知った法律だね。私たちに残した法律だ。君も、日記を読んだ感想を聞かせてくれ」

英二は、冷たくなったコーヒーカップを手に立ち上がり、廊下を曲がって涼の部屋に足に向けた。

涼の部屋には、美智留が飾った水仙の花が密やかに香っていた。

外出から戻った英二いつになく明るく、家族を食堂に集めて「お茶にしよう」と、言った。日曜日の午後である。塔子は紅茶を入れ各人の前に置いた。心地よい香りが食堂の中に漂った。

英二は買ってきたケーキを一人一人に取り分けて、ケーキ用のフォークを加奈子が受け皿に添えて行った。英二はケーキの皿をゆっくりと各自の前に置いて行った。

英二はケーキのない子に加奈子を選んだ。

「あ、私のが無い」

「そうだね。一人分忘れた」

と、英二は落ち着いた様子で笑顔を見せた。

「モンブランは、私大好きなの」

美智留は自衛本能を働かせた。

「お父さんも好きだ。お父さん、食べたかったから買って来たんだ」

「私に誰か頂戴。半分でもいいわ」

宏は既に、フォークを口元に運んでいる。

「お父さん、ちょうだい」

加奈子は泣きそうな表情で英二に甘えた。

英二は加奈子の表情を静かな心で見守って、

「考えてみたい事があるんだよ」

と、子供たちを一人一人見守った。

「今、ケーキが一つ足りないね。ケーキが貰えない加奈子はどんな気持ち？」

「私にくれないのは意地悪されていると思う。差別だわ、とても嫌な気持ち」

「そうか。では、美智留は？妹が大好きなケーキを貰えないのを見てどう思う？」

「...本当は半分上げればいいのかね」

「しかし、美智留は、自分はケーキが大好きだと。あれはケーキがない加奈子に本当はあげたいけどあげられない、と言う意味では無かったのかい」

中学生の美智留は黙ってうつむいた。

「では、三人に尋ねたいのだが、涼ちゃんはおやつ、どうしてた？」

美智留と加奈子と宏は、下を向いたままで顔を見合わせた。

「涼ちゃんは、自分の分のおやつをちゃんと食べていたかい？」

英二は、ちらっとセツの方を見た。セツはテーブルに肘をついて額に手を当てていた。

「お父さんは涼ちゃんの日記を読んで初めて知ったんだけど、お父さんが言うのではなく君たちから言ってほしいんだ。怒っているのではないし、責めているのでもない。ただ、これからの事を考えたいのだよ」

英二は、三人の子供たちを深い真剣な眼差しで見守っていた。姉を普通ではない形の死で亡くした、子供たちの気持ちとこれからの生きる指針を、とりあえず、英二自身も定かではない気持ちの中で確定的な答えは出せないが、とりあえず子供の心に前進する糸口は与えたいと思った。

「あの...涼ちゃんのおやつ、みんなで分けて食べたり...私が好きなものは私が涼ちゃんの分も食べたわ」

美智留は、チラッと英二を見ながら言った。

「私も」

「僕も」

「涼ちゃんは何も言わないで見ていたけど、何も言わないでいなくなったわ」

美智留の声は小さかった。

「自分のおやつを目の前で三つに分けて食べられてしまう、そんな事をされたら君たちはどう思う？涼の日記には、おやつを貰えないで怒ったりするのはみっともないから、おやつは要らない、もう要らないと書いてあった。小学四年生の子供がだよ」

英二は十歳の子供が、妹達のとる行動を見守っている姿を想像して痛々しく、切なくて胸にこみ上げるものをグツとこらえたが、それでも涙がにじんできた。

こんな事が自分の子供たちの中で生じていたなんて、全く知らなかった。

「お祖母ちゃんは、涼姉ちゃんにおやつはあげなくていいって。涼ちゃんは汚い子だからって」

「汚いって？」

「お父さんとお母さんが結婚する前に生まれた子だから不純な子だって。だから」

「いいや、言っとくが涼は汚くはないし、不純な子でもない。お父さんとお母さんの初めての大切な子供で、そして君たちのお姉さんだ。」

幾つかに分けてお菓子やフルーツがあると、涼が一番小さいのを自分の皿に取り分けていたよね。それはなぜだと思う？それは、君たちに大きいのを食べさせようと思っていたからだよ。涼はそんなに優しいお姉さんだったのだよ。涼は汚くもないし、不純な子でもない、大切な家族だ」

「お父さん、涼ちゃんは私たちがずうっと涼ちゃんのおやつを食べて来たから死んだの？」

美智留の頬を伝う涙を見て、英二はドキッとした。涼の死を子供たちに関連付けるのを一番恐れていたのだ。しかし、英二の目は毅然としていた。

「そんな事は無い、そんな心配はしなくてもいい。涼ちゃんの死は美智留や加奈子や宏のせいではない、分かった？」

「そう、そう思っているの？」

英二は、子供たちの肩を抱いた。

「君たちのせいではない。それは信じなさい、いいね」

「本当に、そう思ってもいいの？」

「今日、お父さんがケーキを買って来て、涼のおやつの件を持ち出したのはね、涼の日記の中に書いてあった事を、家族全員で実行していこうと思ったからだよ」

英二は、子供たちの顔をみつめた。

「涼ちゃんはケーキや果物を皆で分けて食べるとき、一番小さいのを取っていたと言ったよね。涼は、自分にして欲しい事は人にもしなければいけない。自分にして欲しくない事は人にもしてはいけない、と言うことをこの家にいて勉強したんだよ。」

皆、おいしい者や好きな物はたくさん食べたいよね。しかし涼は皆に沢山あげて自分は少ないものを取っていた。そんな風に家族がお互いを思いやり親切をしめしあって行けばみんなが幸せになれる、と涼は考えて答えを出したんだ。涼が考えたこれを家の法律にしたいと思う。生活して行く様々な事をそうするんだ。涼がいなくなって、壊れそうな水木家の人々だけど、涼が学んだ事を皆で持って行けばきっと、きつとうまく行くと思う。いいね」

子供たちは、無言のまま頷いた。

「では、加奈子のケーキは冷蔵庫にあるから、三人で部屋に行って食べなさい」

「お父さん、ありがとう」

加奈子は、英二の心の重さなど意に解する事無く満面に笑顔を浮かべた。

加奈子の笑顔は、英二の胸に失意に似た悲しみを刻んだ。

子供たちは、食堂を出て行った。

美智留は加奈子と宏の後ろから、自分たちの部屋のある二階へ向かいながら、お父さんもお母さんも嘘をついている、と思った。涼ちゃんの死は自分にも加奈子にも宏にも、責任があると思った。お祖母ちゃんが、涼ちゃんのおやつを皆で食べようと言っても、本当は食べては行けなかったのだ。涼ちゃんが食べてもいいと言わない限り、食べてはいけなかったのだ、と美智留は思った。

自分のおやつを食べられてしまった時の涼の悲しそうだった顔を、美智留は思い出した。あの時は涼ちゃんをあざ笑う気持ちだった。しかし、今考えるととても残酷な気持ちで残忍な事をしたのだ、美智留の足はすくんだ。

涼ちゃんと遊んでいると、お祖母ちゃんは必ず涼ちゃんを除いて私たちを呼び寄せた。涼ちゃんが来るとドンと突き飛ばして、部屋の戸を閉めてしまっていた。

だから、涼ちゃんはいつも一人ぼっちで、いつの間にか涼ちゃんの部屋に閉じこもる様になってしまっていた。涼ちゃんは四人姉妹弟の中でいつも一人ぼっちだった。

美智留は胸が張り裂ける様な圧力を受けた。涼ちゃんの気持ち、何にも考えなかった。涼ちゃんの事、本当に同情も憐れみも感じないで...何も考えてあげないで、私も涼ちゃんを自殺に追いやったのだ。

ケーキは、美智留の手から離れて皿ごと階段に転げ落ちていた。美智留は、階段の途中にうずくまって、激しく泣きじゃくっていた。

お祖母ちゃんなんか嫌い！お父さんもお母さんも嫌い！私の事も嫌い、私はどうしたらいいの。泣きじゃくる美智留を、加奈子と宏は階段の上から当惑しながら見ていた。

食堂では、塔子が温かい紅茶を入れていた。

ストーブの上に掛けられたやかんの蓋が小刻みに動く音がしている。

英二は、塔子がテーブルに戻るのを待って

「君は、涼をどのように思っていたの。かなり残酷な事をしたよね」

塔子は、言葉もなくうつむいた。涼の日記を読んで水木家に対する涼の気持ち、母親である塔子に対する感情を塔子は思い知らされていた。

涼にとって大切な時期に、家族が、そして塔子自身が涼の道の行く先を阻んでいた。

それどころか、涼が失意のうちに選択した致命的な進路へ進むように突落していたことも知った。

“お母さんは 私のお母さんでは無くなっているのだ。お母さんは、私のお母さんでは無いのだ。私は風に乗って、光に逆らって真っ直ぐに太陽に飛んで行きたい。この地球の上にもう、欲しいものは無い”

涼はそうのように日記に書いていた、涼がいない、もう、涼はいない。でも、あの子がいないなんて信じられない。そうよ、嘘に決まっている。涼がいないなんて、と、塔子は繰り返し思った。強く耐えてくれる子だと思っていたのに、全てを理解してくれていると思っていたのに...そんなに、そんなに傷ついていたのね。

塔子は呼吸をしている事がやっとだと思った。

「覚えているかい？何年も前のニュースで、母親が自分の子供を虐待死させたことを報じていた時に涼が言った言葉...」

「...」

「涼はこう言った。母さんも聞いていて。涼は“そのお母さん、殺すほどに虐待したから世間に明るみに出てしまったわね。半殺し程度にしておけば秘密にできたのに。こういう事って、子供が死ななければ誰にも知られないのね。でも子供は死んで良かったと思う。だって、虐待される心の辛さも悲しみも死ねば終わるもの。”と言った。

君はどうしてあんな酷い事が出来たの。涼の気持ちを考えた事は無いのか」

英二は静かだった。塔子を、責めているのでは無かった。それは、塔子と同じ罪を感じるので、塔子を責める資格は無いと思って居るからだ。ただ、塔子の気持ちを知りたいのだった。

「あなた」

英二を呼んだ塔子の声に思いがけない強い響きがあった。

塔子は、親にさえ別れの言葉もなく逝ってしまった事を悟った時、何と冷たい娘だろうと、情けなかった。

そして、自分は涼にとって何だったのだろうと、胸が潰れる思いだったが、涼はとうの昔に、自分は母親にとって何なのか疑問を持っていたのだ。

死ぬ間際の涼の行動に初めて、不信を持った理由は大事な時に無視された気持ちになったからである。

しかし、子供にとって、一つ一つの出来事が、初めての体験であり目にする世界も感じる世界も大人とは全く違っている。

信頼する事も、頼ることも子供にとっては親が全てである。その親から受ける不信、疎外感子供にとっては重要な問題に成って来るのだ。自分は家にとって何なのか、親にとって自分は何なのか、それは当然生じる不安である。

その不安を小学生の我子が抱いていたなんて、親として最悪の状況を与えていたことが塔子は衝撃だった。

また、大学受験を考えていた涼がセツと食堂で話し合った時、返事をしようとしないうちに腹

が立って、その怒りを涼に向けて涼を狂人呼ばわりしたことが、涼の背に勢いをつけて押した結果になったことを知ったばかりだった。

塔子の目に、強い怒りの光が射していた。

「あなた、そしてお義母さん。私は涼がとても可愛かったんです。添い寝をしてもあの子に背中を向けて寝る事が出来ないくらいに、涼が可愛かったんです。

涼と水木に来た当時から私には予想が付いてましたけど、顔が合うと小言と皮肉で涼にとってこの家は恐ろしい家だったんです。理由もなく抓られたり打たれたりでしたよね。そのことをお母さんと話し合いたいと思った事もありました。

でも、涼に我慢するように言いつけてお義母さんと話し合うことを諦めました。

涼が時々、教科書がないとか辞書がないなどと言って困っている事がありましたけど、あれは、お義母さんの仕業だったのでしょうか？私にはすぐに解かりましたよ。

なぜなら、朝食の用意をするときに、前の晩に仕込んでおいた電気釜の内釜が無くなっていたり、包丁が見当たらなかつたり本当に困りましたから」

英二は目を閉じて塔子の言葉を聞いていた。実際、塔子も言いたいことをこの際言った方がいいと英二は思っていた。むしろ、言わせてやりたかった。セツは、ふっと笑って塔子の怒りを助長させた。

唇の端に笑みを浮かべたセツには、言うだけ無駄と思いながらもそれでも塔子は言わないではいられなかった。

「そうした様々な仕打ちと、親類からの皮肉やら本当につらい毎日でした。そんな時にお義母さんが大切にしてくださったお湯呑みを、涼が割ったとおっしゃるお義母さんと、知らないと言う涼と...私はあの時、涼に嘘を言ってはいけないと、体罰を加えました。その後、お義母さんは私にとても優しく親切にしてくださって」

塔子は辛そうに息を詰ませた。

「私は水木に来て、初めてホッと息が出来るのを感じたの。平安だと思いました。

それから私は、涼につらく当たる様になってしまって...涼が可哀そうで。

あの子は、だんだん私から離れて行って私、辛かったわ。だから、“許して、お母さんの気持ちを分かって”と言う意味でお母さんは涼につらく当たるけど我慢して、と言ったのです。その言葉が涼に失意を与える事になるなんて、涼に嫌われる切っ掛けになるなんて、考える余裕も無かったの。私、涼に対して勝手でした、身勝手でした。涼の気持ち、何も理解しないで、押し付けてばかりで。涼が幼い時長崎に帰ろう、高遠に帰ろう、と泣いた時に帰っていればよかったのよ。そうすれば涼の日記に書いてあったように、涼は、悲しみも孤独も人を恨む気持ちも知らないで、幸せだったかも知れない」

と、涙を流す塔子の言葉に、英二は

「涼はこの家に来ない方が幸せだったのだろうか。父親の私が居なくても幸せだったのだろうか」

英二は、高遠の広い庭で、従姉たちや近所の子供たちと遊んでいた涼を思い出した。

「涼、お父さんだよ」

と、涼を抱き止めようと両手を開いた英二に向かって笑顔を見せた涼。畑仕事から帰って来た塔子の長兄、俊一に「お帰りなさい」と、駆けて行った涼を、俊一は軽々と抱きかざして、それから腕の中に抱いていた光景が思い出された。

あのまま高遠の家で育っていたら、あの時の笑顔は花のように今も咲き続けたのだろう。涼は、この家に来たから...英二は、ドンとテーブルを握りこぶしで打った。

英二のいとこのマサ江が

「涼は見る度に淋しそうになって行くね、最近ではすっかり無口になってしまって。子供を、こんな風にしてはいけないよ。」

と、言ったことも思い出された。

涼が自殺をした次の日に、知らせを受けて飛んできたマサ江夫婦は「こんな事になるのだったら、水木から涼をもぎ取っておけば良かった」

と、鋭い視線を水木家の人々に向けて、悔しさに嗚咽した。

「涼も姉さんの家に行きたがっていた」

と言うと、マサ江がワアッと泣き伏したその背中が英二の胸に痛みとなって思い出された。

家族とは、何？

母にとって私は、何？愛せないのなら、何故、私を生んだの？

生まれる事も、生きる事も一体何なのだろう？

親と子供って何？子供は親も生まれる家も選べないのに...

涼の文字を、英二は思い出す。

「お義母さん、あなたは一体どういう人なのですか？涼をなくした今、私はもう怖いものはありません。この家がどうなっても、人に何を言われてももう少しも構いません」

美智留と加奈子と宏の三人の子供たちは寄り添いあって食堂のドアの前に立って、塔子の声を聴いていた。

「母さん、母さんは」と、英二。

「私は、お前たちの結婚に反対したけどその気持ちは今も変わらない。私の友人の娘さんと英二を結婚させる約束でいたのに、英二は勝手に家に女を入れてしまった。しかも、その女は結婚もしないのに身籠っていたわ。認められないと言うのに、もう赤ん坊がいるからと、英二、お前は強引に家に連れて来て、自分は外国へ行ってしまったでしょう。お父さんは、結婚を許したけど内心は私と同様に反対だったはずだわ。だから、息を引き取るときも淋しかったと思う、お父さんは」

「父さんは、許してくれていたよ。だから亡くなる前の日に母さんを許してやってくれと、母さんを頼むと僕と塔子に言い残してくれたよ」

ケーキも紅茶も、テーブルの上に忘れられてすっかり冷めてしまっていた。

些細な事でも、意見をされたり、気に入らない事が有るとこちらが言葉を無くすほど感情的になり、話も出来なかったが涼の死には堪えるものがあると見えて、強い言葉ではあるが会話が出来た。

「私の承諾もなく、家に入り込んだ塔子もふしだらな結果に生まれた涼も、そして、親の言う事

を聞かなかった英二も、私は憎かったの。友達には私が約束を守らないと、英二との結婚を娘に長年待たせて来たのにこんなひどい仕打ちは無いと、絶交されてしまったわ。他人が結婚前に子供を作ろうとそれは構わない。でも家ではそういう事は許されない事。だからお前たち親子の関係が壊れればいいと思ったのよ。それで、涼を虐めたし、高遠に帰ればいいとも言ったのよ。

でも、塔子、あなたは母親失格ね。私の言いなり。私が考えた通り涼につらく当たって暴力を振るって、その反動で涼に嫌われ、憎まれて。涼に嫌われている事が腹立たしかったのでしょう。なおわが子に暴力を与えて」

「私にも解かっていたわ。お母さんの真意が。おしゃる通りよ。私はあなたに負けていたのよ。でも、もう負けるつもりは無いの」

「涼が結婚前に出来た子供だといえ、殺意を持つほどに涼を憎む、その気持ちが私には理解できない」

英二は、涼の友人たちから知らされた、去年の夏の事件の真実を知りたいと思っていた。

あの夏の日、涼の左手の白い包帯を見てどうしたのかと尋ねた時、涼もセツも何も言わなかったが、こんなに大事な、重要な事を一言も親に話さなかった涼の気持ちを思うと、たまらない無念さがあった。

殺されそうだった、そんな異常な状況を話せなくしたのも自分と塔子なのだと英二は思った。なにを言われても、何をされても我慢しなさい、と。

さすがに、セツも去年の夏の事には胸が痛むのか、ふうっ、と大きく呼吸をした。

「涼は、あの子は私にも英二にも塔子にも、勝ったのよね。私たちは涼に負けたのよ。私が涼におやつを与えなくなかったのはあの子が自分だけおやつを貰えない事でどういう態度に出るか見てやりたかったの。でも、涼は自分のおやつが貰えないと分かったら、もう、おやつには振り向かなかった。それが苛立たしかった。一度注意されると二度と同じ失敗は繰り返さなかった、それが腹立たしかった。そのうち、手伝いと食事以外の時は自分の部屋に閉じこもって、家族と交わることをしなくなって、親とさえ話すことも甘える事もしなくなって、こちらが涼の嫌がることを言ったり したりすると涼は、黙って目を見ていたわ。こちらの気持ちを見透かすような目で。毅然として、凜としてじっと目を見るのよ。あれは、明らかに私の上に立っている目よ。

もう、この子には、何も通じない、そう思ったの。そう思った時体が震えるほど憎かった。それから、あの子の目が怖くなって。なにを考えているのか分からなくて、涼の目に見据えられていると自分が無力に思えて来て涼に憎しみさえ感じた。

涼には私や英二や塔子から感じ取った反抗と言う強い意志があったんだと思う。冷たく毅然とした態度と目の光、私は涼に太刀打ちできないと思うようになっていたの。

言葉には一言も出さないけれど、言葉に出さないだけに大きな拒絶する気持ちが有ったのだと思う。

こちらから何を発しても涼は、ただ見るだけでビクともしなくなってゾツとするような冷たい高慢な目で見ただけで…。私を侮っていたのよ。それで、どうしようもなく腹が立って」セツは、大きく呼吸をした。あの夏の日の激しい感情が今は、信じられない恐ろしいものだった事をセツは思い知るのだった。セツの胸の中に、稲妻に裂かれたような語りようなない戦きが有った。

「涼に憎しみを感じて涼がいなければいいと思ったの。いなければいいと思ったのよ」

テーブルの上のセツの手がワナワナと震えていた。

「涼がいなければお前たちを結婚させなかった」

セツは震える手の中に顔をうずめた。

「母さん、涼は、自分を虐める者の前で弱い人間ではいられなかったんだよ。自分を虐める者の前で、自分は傷ついていないと、平気だと、少しも悲しくないと言う素振りをしていたんだよ。それが、自分を苦しめる者へのせめてもの抵抗だったんだ。

それでもしないと涼はやって行けなかったんだよ。決して、母さんを見下していた訳ではない」

そう、セツに言う英二の脳裏に小学生の時の涼の日記に

「悲しくないと頑張る。淋しくないと頑張る。惨めではないと 空を見上げる」

と、書いてあった事が浮かんできた。

「塔子も、母さんも、人を責める事はよそう」

英二は、塔子とセツの上に交互に目を向けた。

涼の死で、完全に壊れてしまった家庭を直さねば、三人の子供はどうなるのか、心配な英二は、大きく揺れてぶつかりあう感情を宥めようとしていた。

しかし、

「いいえ、人を責めるのはやめようですって、とんでもないわ。

涼は、自分がなぜ苛められるのか、知らないで死んだのですよ。

私も...私は、私がお義母さんから受ける仕打ちは、嫁姑のよくある問題だと思っていました。あなたは、どうですか。私と涼が辛い思いをするのは、私とあなたが結婚した事と涼が生まれた事だと知ってました？

ねえ、知ってました？」

「いや」

「私たちの結婚が不道德から生じた事だと思われるのも心外ですよ。私は自分の命を賭けるつもりであなたに許したのですから。

そうして生まれた涼を、涼そのものをお義母さんは否定してきたのですよ。

そして、母と子の関係を破壊するように働きかけて...涼が自分を見下しているので殺そうと思ったなんて...

それが、あなたの母親なのですよ。

涼は、書いていましたよ。

自分が生まれた事も、生きている事も間違いだって。

涼は、自分をそう思いながら生きて来て、そして死んだのですよ。

責めないではいけない。

お義母さんも、そして事なかれ主義で、問題を私と涼に黙って忍耐させてきたあなたも、そして、お義母さんの手の内にはまっていた私も...

涙を流しながら訴える塔子に、

「君の言う通りだよ。皆に責めがある。だから、お互いに責めるのではなく先の事のために話し合いたのだよ」

「お父さん...」

その時、美智留を先頭に、三人の子供が食堂に入って来た。

「私は、私達はどうしたらいいの？」

私達がしたいはずらや失敗を、お祖母ちゃんは、涼ちゃんのせいにしてお母さんに言いつけたの。そして、涼ちゃんは、お母さんからものすごくひどい事されたけど、私達は知らん顔してたの。本当の事を言って涼ちゃんを助けようとしなかったの。

おやつだけではないの。私達のした事で、涼ちゃんがひどいめにあっていても、何も本当の事を言わなかったの。

お父さん、ひどい事をされても何も言わないで、ただ服従だけさせられて、自分が望むことは何も叶えてもらえないで、涼ちゃんは自殺したのよね。

皆で涼ちゃんを殺したのよね。

だから、この家の人達は、もう、幸せになんかなれない。何を話し合っても、心の奥には、死んだ涼ちゃんが残るもの。幸せになんてなれない」

単刀直入に事実を語る美智留に、大人達は、青ざめた顔の美智留に目を留めていた。

「お祖母ちゃんが中心になって、皆で涼ちゃんを苦しめて、誰も涼ちゃんを理解さえしてあげないで。皆、自分の事しか考えないで...。

私は、どうしたらいいの。

涼ちゃんに、私は何をしたらいいの」

泣き叫ぶ美智留の気持ちは、セツにも、塔子にも、英二にも投げられた質問だった。

「この家の人達は、誰も幸せになってはだめなのよ。涼ちゃんは、死ぬ事で家族の全員に抗議したのよ。涼ちゃんの抗議を私達は受けなければいけないわ」

「美智留、それは違う」

英二は、静かだが力を込めた声で美智留の言葉を遮った。

残されたものの心の重みを思うと、全てを明らかに並び広げるのはためらわれたが、子供の一人が根底にあるものを曝したのであれば、それはそれで良い、と英二は思った。

そう、涼のために。今となっては、それしかないのだ。

一人一人が、涼の死に責任を負わなければならないことは確かだ。自分は、その事も隠そうと、避けようとした。

全てを明らかにする事で、母さんも塔子も、そして私も、自分を知る事になるのだろう、と英二は思った。

そうなれば、各人が目茶目茶になるだろう、しかし、それでも涼への責任はあるのだ。

すでに美智留が、それを感じているのだから一。きれい事ではすまされない。

そう思いながら、英二は、

「涼ちゃんの友達が、家に来ただろう、五人で。野上さんの息子の敏夫君と、千秋ちゃんと...。あの涼ちゃんの友達に、お祖母ちゃんが、涼は家族の事は何も考えないで、不満に対する復讐の

ために自殺をした、と怒鳴った時に、あの子達が言ったんだよ。

新年の四日になっても、涼の遺体は発見されなかった。

英二は、警察から返された涼の遺品の中にあった見知らぬベージュのマフラーと、その中に差し込まれてあった、小さな涼のメモを見せられた。

「他に遺書らしいものはありませんでしたが」

渡されたメモには、

私を　ありがとう。

ごめんなさい。

それと、五人の名前が記されてあった。

英二は、遺品を受け取って数日を過ごし、野上敏夫に電話を入れて、涼の友人の五人に家に来てもらったのだ。

五人は、それぞれ、白い花、白い水仙、温泉育ちの白いマーガレット等、白い花を持って来て、涼の部屋に飾ってほしい、と言った。

「涼ちゃんが、白い花を一輪ほしって、最後の日に言ったんです」

「そう頼まれた時は、何も感じなかったんだけど、それが私達に対しての別れの言葉だったんだと、涼ちゃんがいなくなって気が付いたんです」と千秋は涙ぐんでいた。

英二は、涼が残した小さなメモを、若者たちの前に差し出して、このマフラーの中にありました、と付け加えた。

「そのマフラー、僕のです。水木涼...ちゃんに貸した、と言うか、プレゼントした、と言うか...。頂いて行きます」

藤田は、英二からマフラーを受け取ると、ゆっくりと、自分の首に巻いた。

藤田の目に、ジワジワと涙が浮かんできた。

そこに、セツが、お茶とお菓子を持ってきた。

セツは、頭を下げる若者達を見ながら、座卓の上にお茶を差し出した。

「あの子は、家庭への不満を自殺と言う形で復讐したのですよ」

と、事もなげに言った。

「復讐？そう思っているんですか」

敏夫が英二の目にぶつかるように視線を向けた。

「え？まあ」と、言葉を濁す英二に、

「それは違います。涼ちゃんは、とても辛い思いをしてきたから、自分も人に意地悪したり、傷つけたりする人間になるのではないかと、絶対そうした人間になると、なぜか信じていて、そんな人間になるのなら、生きていてもなにもならないと、そう言ったんですよ。そう言ったその後で...海へ...」

「何て人だ、あなたって人は。こんな事になっても、まだそんな事言っただけ。涼は、あなたのような人になりたくなくて、あなたに殺されそうになって...生きる希望の全てをなくしてしまったんだ。人を憎む事、嫌う事を恐れて死んだんですよ」

若者達は、口々に反発を見せた。

若者達の言葉を聞きながら、家族の中の誰かが、この若者達のように涼を庇う者がいたら、涼も少しは良かっただろう、と英二は思った。

「僕と二見は去年の十月ごろ、水木涼の部屋に入れてもらった事がありました。その時に、水木涼は自分の進路を決めた、と、行く道を決めた、と、その方がいいの、と言いました。その時に、水木涼は、決して復讐ではない、と言ってました。何の事か、僕にも二見にもよく理解できなかったけど、あの時にはもう覚悟していたんですよ。復讐ではないと、お母さんやお祖母さんのような人間になりたくない、と。水木涼は、復讐のために死ぬような人間ではないですよ」

若者達は、そう言って帰って行っただが、その時の事を話して、
「涼は復讐とか、抗議のために死んだのではない」と英二話した。
「人を傷つけたり苦しめたりする人間になりたくなくて、愛されて育っていないから、人を愛する事の出来ない人間になるだろうと、友達に話したそう。人を愛せなくて、傷つけても平気で生きる人にはなりたくなくて、自殺したんだよ。この重みを理解する人間が、この家の中に何人いるだろう」

英二はそう話しながら、自分がした事よりも、涼に力を振るうように仕向けたセツを非難して居た塔子に注意を向けていた。

事実は事実、今までは、涼が言っていたように世間隊を気にして、家庭での問題を家の中だけに収めるために、家族に忍耐させる事でよしとしてきた。

そのために最悪の状態に陥ってしまった。

英二は、子供達に真実を話した。

子供達は、涼の死をどのように受け取るのか、分からないが一。

「涼ちゃんが言っている事は正しいと思うの。」

自分がして欲しくない事は人にもしない。

自分がして欲しい事は人にもしなければならない、その通りだと思わう。

だから、私は、涼ちゃんの考えた通りにするわ。涼ちゃんもそうしていたのだから。

でも、お父さんもお母さんもお祖母ちゃんも、いい人ではない。とても怖い。

人間って、本当の姿はそんなに怖いものなのかもしれないわね。

人間の本質ってお祖母ちゃんやお母さんやお父さんのようなものかも知れない。

でも、世の中には、愛、と言う見えない物があるのよね。

今の世の中では、愛、なんて力が弱い、全然手応えがない。涼ちゃんは、その愛だったのではないかしら。

自分は、家族の全員になき者にされながら、家族に思いやりを与えていた。愛を与えていた。でも、誰もそんなの気にもしないで、自分の事だけに夢中なのよ。だから、もしかしたら一番必要だったかも知れない小さな小さなものを踏みにじってしまうのかも知れない。

無力な、けれども本当はとっても大切なものを消す事に、知らず知らずに憎しみの心が共同し合って目に見えない大切なものを失くしていくのよね。

破壊する力の方が大きくて強くて、優しく、温かいものは踏みにじられて砕かれてしまう。

涼ちゃんに会いたい。

涼ちゃんに何度も何度も謝って、そして、涼ちゃんが誰にも気づかれないで示してくれていた心を、私は涼ちゃんと育てていきたい。

涼ちゃんに会いたい...」

英二は、美智留の傍に行き、その肩を抱きしめた。

涼の心を、涼が誰に気付かれなくても家族に示していた心を育てていきたい、という美智留の気持ちが英二にはありがたかった。

今、それぞれが持つ感情を乗り越えなければ水木の家族は立ち直れない、と英二は思う。

そして、三人の子供達の心を守れないと思う。

子供達の心が何処かへさ迷わないことを英二は願う。

英二は、加奈子の方に手を伸ばし加奈子の手を取ると優しく引き寄せた。

そして加奈子も宏も自分の腕の中に抱えこんだ。

「お父さんが悪かった。この家の中の事を何も知らなかった。このお父さんが悪かった。

涼の気持ちも理解できないで、この家で何が問題なのか、判っていたのに手を下す勇気がなくて。君たちではなくて、お父さんが悪かったのだよ。

こんなつらい思いをさせてごめんね」

美智留の腕が英二の背に回されて、英二のシャツをしっかりと握った。

「みんなで、涼ちゃんが日記に書いていたことを、しっかりと、しっかりと守って行こう。決して人が嫌がる事をしてはいけない。

周りの人の事を自分自身のように深く考えて、自分が嫌な事、されたくない事は、決して人にもしない。

「涼ちゃんの心よね。守っていけるわ、きっと」

「私も...」 加奈子が英二を見上げた。

塔子は、英二と三人の子供たちの様子を涙と共に見守っていたが、子供たちの背に寄り添って、宏と美智留を抱きしめるように両腕を回し、中央に立つ加奈子の背に頬を押し当てた。

涼、涼...塔子は今は亡き娘の名前を心の中で呼び続けていた。

水木の人々にとって、涼というその名は心の一番深い所に静かに生き続けることだろう。悲しみと痛みと共に。

人は自分の言動の及ぼす力を考える人は少なく、その言動の結果がどうなるか、想像力を持つ人も少ない。

そして、自分の言動の結果の出来事に当惑して逃げ惑う。

(コロサイ 3:14) ...愛を[身に着けなさい]。

それは結合の完全なきずなのです。

白い花をください

<http://p.booklog.jp/book/55416>

著者：高橋 フミ子

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/jwkokoro/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/55416>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/55416>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ